

人吉市復興まちづくり計画

(令和7年4月改定版)

人 吉 市

人吉市復興まちづくり計画（令和7年4月改定版）

目 次

第1章 はじめに	1
1 計画改定の背景	1
2 計画の位置づけと構成	2
3 計画期間	4
第2章 人吉市を取り巻く環境	5
1 人吉市の現在	5
第3章 人吉市の特性	11
1 人吉市の強み	11
2 人吉市を取り巻く環境	23
第4章 復興まちづくりの進捗	29
1 流域治水プロジェクトによる安全性の担保（広域土木関連）	29
2 復興まちづくりの進捗	37
第5章 復興まちづくり計画	53
1 復興まちづくりの基本的な考え方	53
2 重点地区とまちなかエリアの設定	60
3 人吉市まちなかランドデザイン	65
4 分野別施策	68
4-1 地域の自治を担うコミュニティへの再生	71
4-2 力強い地域経済の再生	73
4-3 災害に負けないまちづくり	89
第6章 実現に向けて	101
1 計画の実現に向けた取組方針	101
2 復興まちづくり工程表	102

第1章 はじめに

1 計画改定の背景

本市においては、令和2年7月豪雨により未曾有の大水害に見舞われ、多くの市民の尊い命と財産が失われるなど、これまでに経験したことのない甚大な被害を受けました。

2019(令和元)年度末から日本全国がコロナ禍に巻き込まれ、経済状況の悪化が続く中、2つの災禍が同時に人吉市を襲い、以前から進行していた人口減少とまちなかの空洞化が加速度的に進みました。

担い手不足や地域経済の衰退等の問題がより顕在化し、多くの事業所を取り巻く環境は非常に厳しく、市民の生活基盤である「なりわい」も危機的状況となりました。

本市では、一日も早い復旧・復興のため、2020(令和2)年9月に人吉市復興基本方針（以下「復興基本方針」という。）、2021(令和3)年3月に人吉市復興計画（以下「復興計画」という。）を策定し、復興の将来像を「球磨川と共に創る みんなが安心して住み続けられるまち」としました。

その後、復興計画に基づき、被害が大きい8地区毎に地区別懇談会を開催し、住民主体で検討を重ね、2021(令和3)年10月に人吉市復興まちづくり計画（以下「復興まちづくり計画」という。）を策定しました。

復興まちづくり計画は、市民の生活再建と人吉のまちの再生、そして未来型復興に向けた復興まちづくりの方針を定めるとともに、実現に向けて取り組むべき内容を、公共施設整備等をはじめとしたハードの取組と、市民生活やなりわい等に関わるソフトの取組の両面の施策が立案されています。

当該計画策定後、被災者自身による復興や公共事業等による復興など、各主体の連携・協働により、市全体の復興に向けたまちづくりを推進してきました。

本計画は、豪雨災害から4年が経過し、都市基盤や公共施設等の復旧、住まい、事業所の再建など生活基盤が整っていく中、計画期間（当初策定）の中間年次となることを契機に、復興まちづくりの進捗状況を総括し、今後取り組むべき視点を再整理し、災害により加速度的に衰退した「人々の暮らしとなりわいの復興」を重点テーマとして見直しを行うものです。



2 計画の位置づけと構成

1) 計画の位置づけ

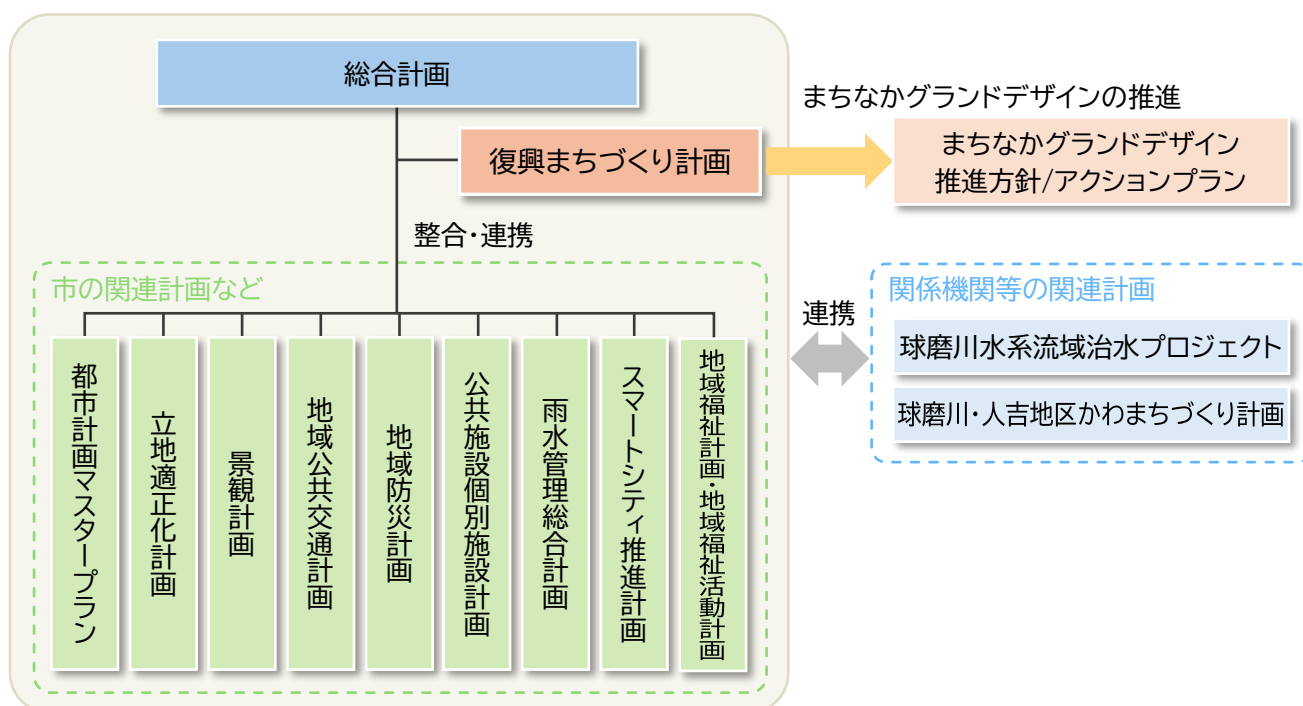
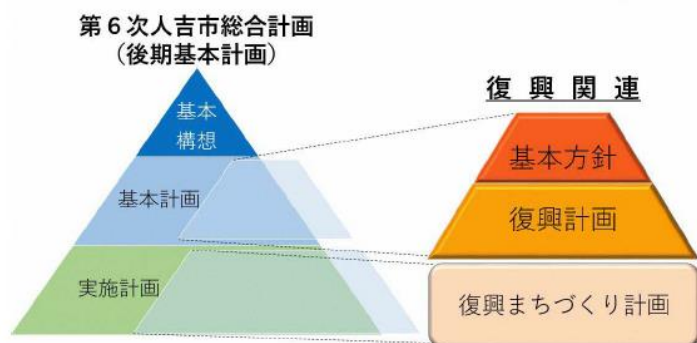
復興まちづくり計画は、復興基本方針を踏まえ、復興計画の実現に向けて取り組むべき内容を示すものとして策定しました。

復興計画は令和5年度末に計画期間が満了となり、2024(令和6)年3月策定の「第6次人吉市総合計画（後期基本計画）」に一本化され、事業成果等の把握を踏まえながら、毎年見直しを行うこととしています。

本計画は、第6次人吉市総合計画を上位計画とし、市の各種計画を横断的・有機的に結ぶ計画となります。

取組主体は、市民・事業者・行政等多様な主体を想定し、特に被害の大きい地域では、まちづくりの方向性及び具体的な取組を位置づけ、各主体の連携・協働により推進します。

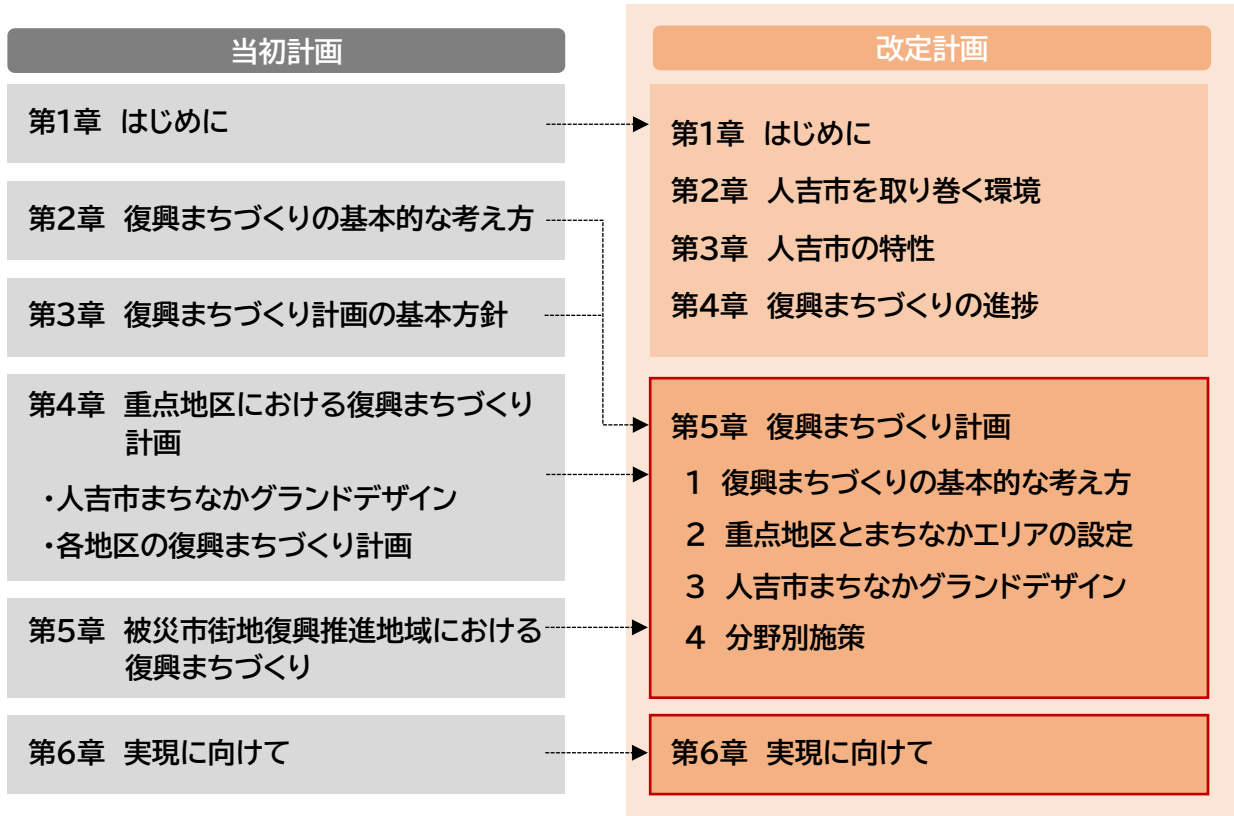
■復興まちづくり計画の位置づけ



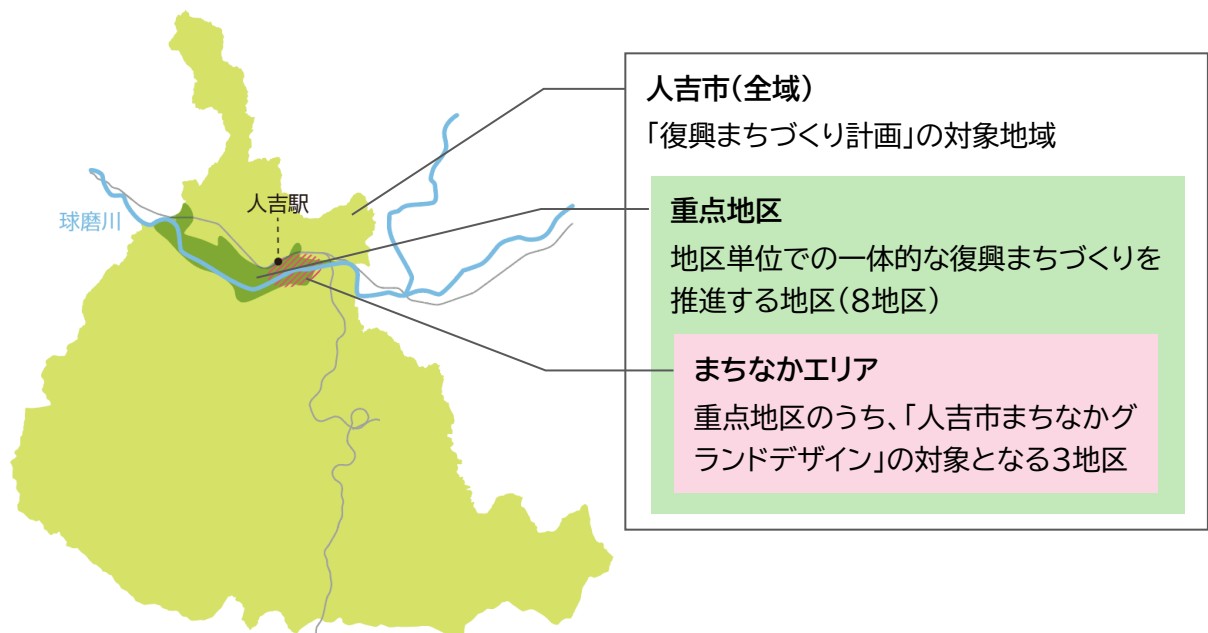
2) 計画の構成

本計画は、2021(令和3)年10月の当初計画策定後、市の関連計画や事業の進捗状況、「人吉市まちなかグランドデザイン推進アクションプラン」（令和7年3月策定）（以下「アクションプラン」という。）の推進体制等を踏まえ、「人吉市まちなかグランドデザイン」と「分野別施策」を中心とした構成としました。

■復興まちづくり計画の構成



■計画の対象地域



3 計画期間

本計画の計画期間は、復興基本方針の計画期間を踏まえ、2027(令和9)年度までの約6年間としています。

ただし、復興関連事業の中には、本計画期間を越える事業期間が見込まれるものもあり、今後、事業の進捗状況や社会情勢の変化、新たなまちづくりの動き等を踏まえて、まちづくりの方針や推進方策の検討が必要になる場合も想定されます。

また、2027(令和9)年度には第6次総合計画の計画期間が満了することから、本計画についても進捗状況のモニタリングを行い、計画のレビューを実施したうえで、新たな計画の必要性を検討します。

■計画期間

年度	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2026 (R8)	2027 (R9)	2028 (R10)	2029 (R11)	2030 (R12)	2031 (R13)	2032 (R14)	2033 (R15)
総合計画	(第6次)前期基本計画				(第6次)後期基本計画									
							策定		(第7次)前期基本計画				後期基本計画	
復興計画	復興基本方針													
		復興計画(第1期)						連携						
復興 まちづくり 計画		復興まちづくり計画												
								計画のレビュー						

第2章 人吉市を取り巻く環境

1 人吉市の現在

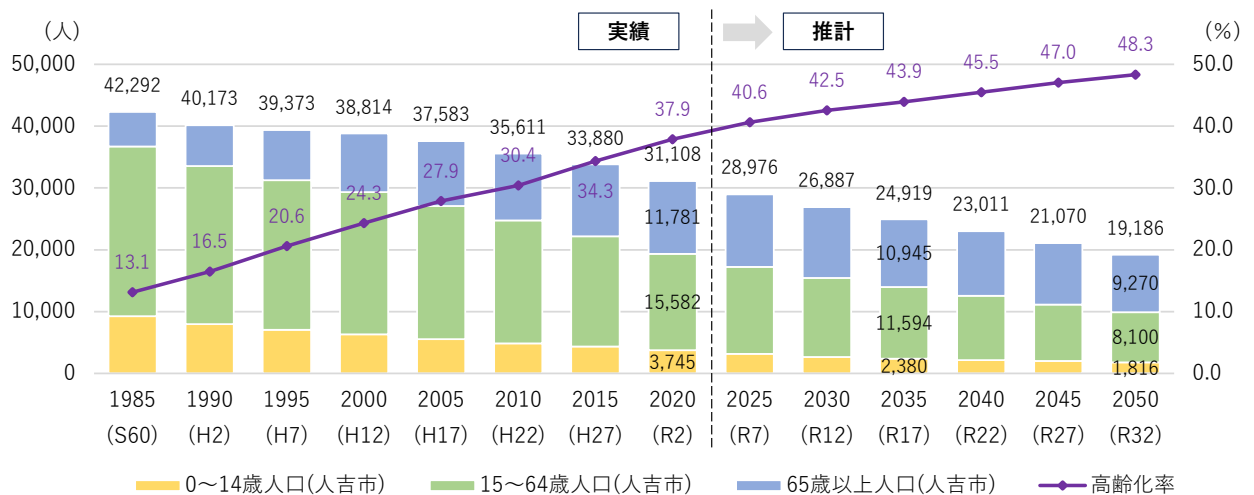
計画改定の方針や視点の検討に当たり、人吉市の現在について整理します。

1) 人口動向

- 本市の人口は、1955(昭和30)年の47,877人をピークに減少傾向に転じており、2024(令和6)年12月末時点では29,741人とピーク時の約6割となっています。
- 国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によると、今後30年間で約1万2千人が減少し、2050年には総人口が2万人を割ると見込まれています。
- 年齢別には、高齢化が進行し、2035年と2050年にはそれぞれ、高齢者は10,945人と9,270人、高齢化率は43.9%と48.3%で、約半数が高齢者になると見込まれています。
- 地域別には、令和2年7月豪雨の前後で被害の大きかった重点地区の人口を2020(令和2)年6月と2024(令和6)年6月で比較すると、水害前の14,461人(45.3%)から12,823人(42.9%)へと減少しており、回復に時間を要しています。
- 地域別の人口動向※をもとに人口推計を行うと、まちなかエリアは市全体と比べ減少傾向が大きく、市全体に対する割合も小さくなっています。

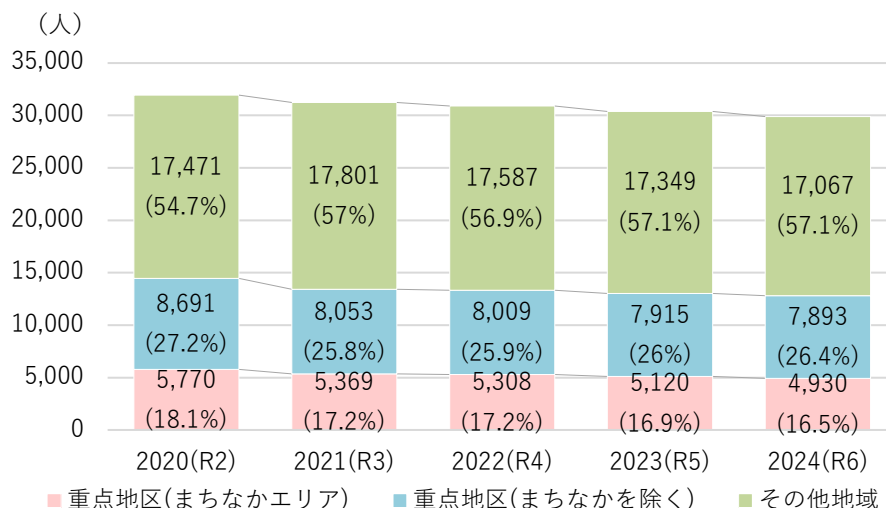
※水害前までの過去10年間（2005～2015年）の移動状況

■人吉市の人口の推移と見通し



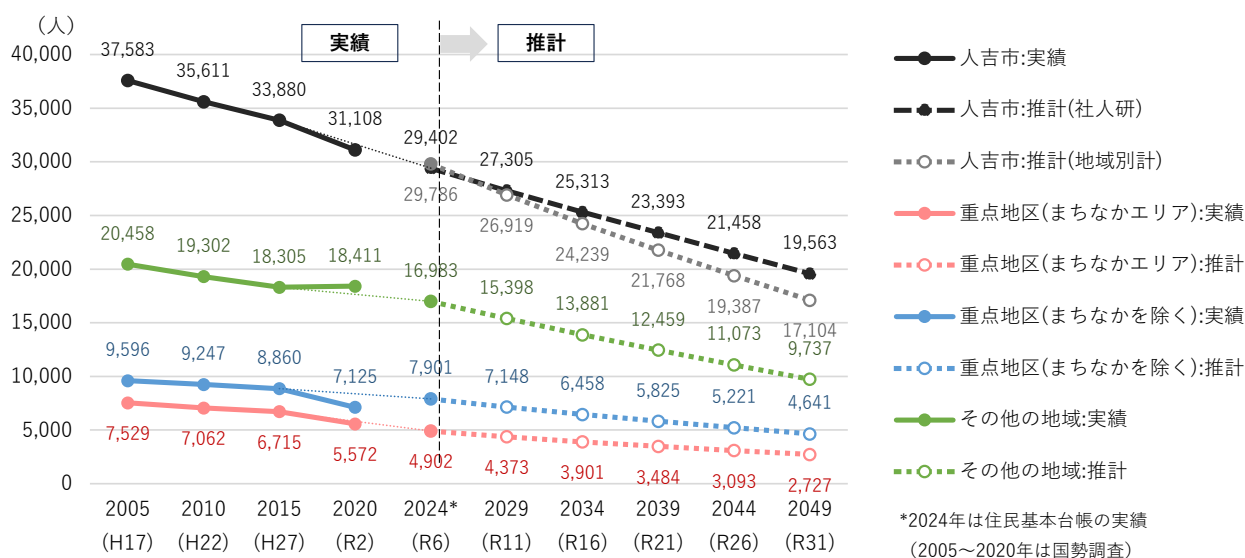
資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所

■水害前後の地区別人口割合の変化

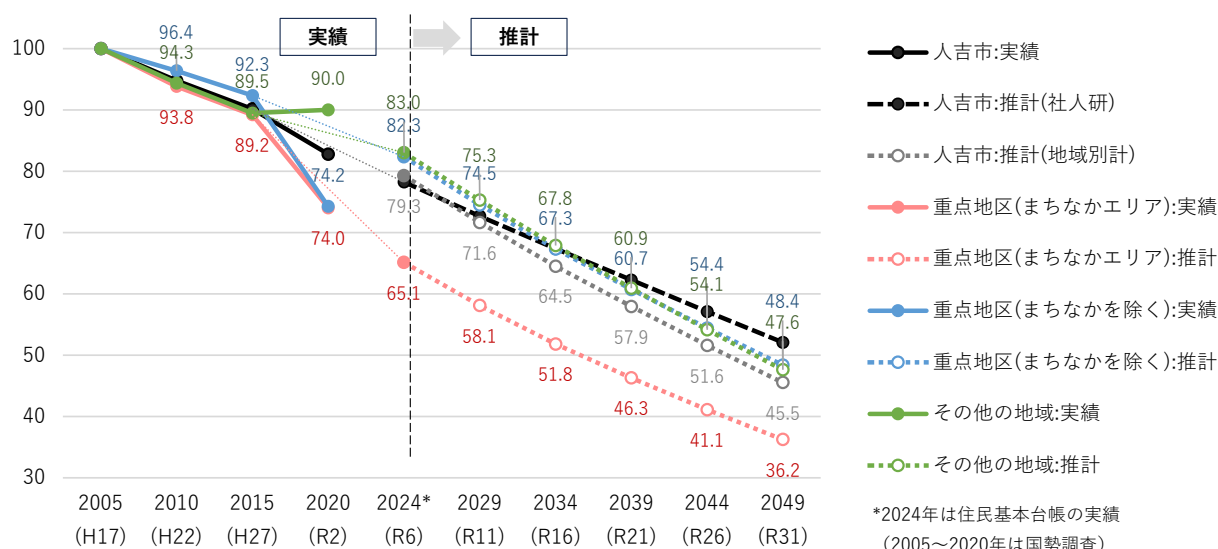


資料：住民基本台帳（各年6月）

■地区別人口の見通し



■地区別人口の見通し（2005年を100としたときの増減（指数））



資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所、住民基本台帳をもとに独自に推計

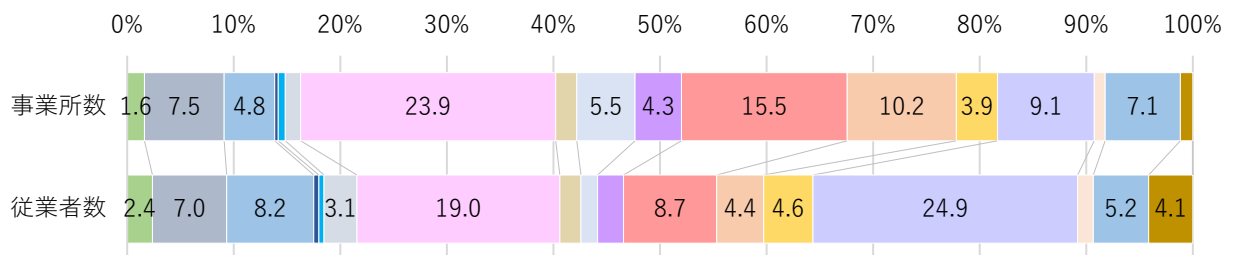
2) 産業・働く場

(1) 人吉市の産業構造

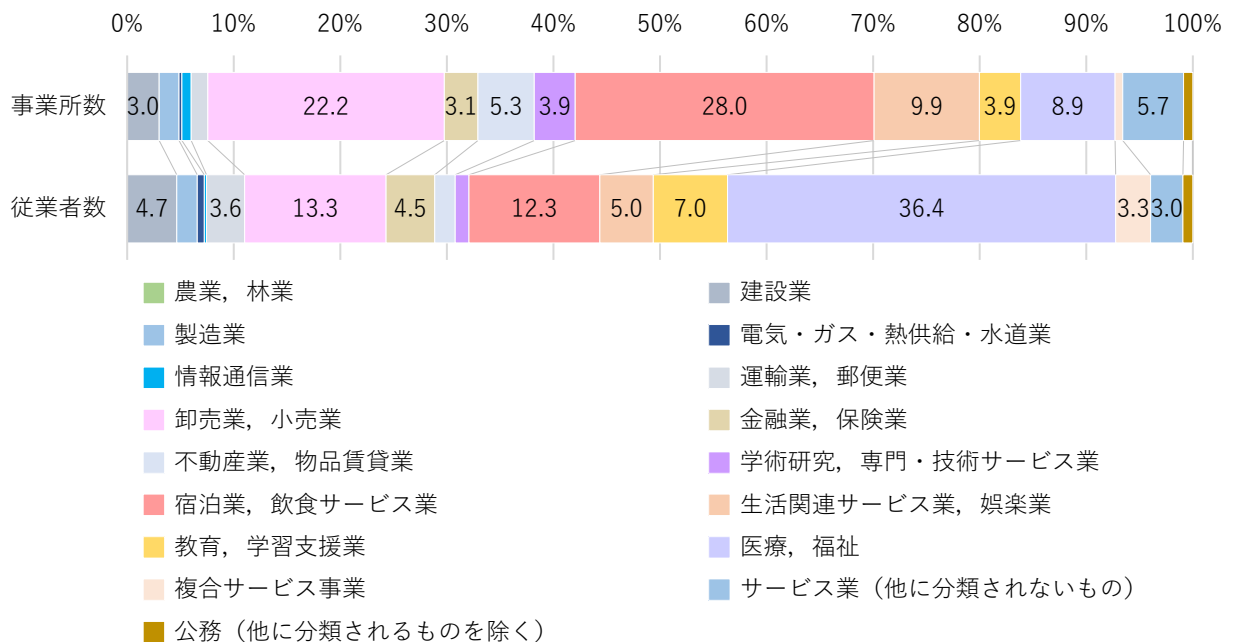
- 本市の産業構造は、第三次産業の占める割合が高く、従業者数では第一次産業 2.4%、第二次産業 15.1%、第三次産業 82.5%という構成比になっています。
- まちなかエリアでは、市全体に比べて事業所数では宿泊業及び飲食サービス業の割合が高く、従業員数では医療、福祉の割合が高いのが特徴です。

■人吉市の産業構成

【市全体】



【まちなかエリア】



資料：令和3年経済センサス・活動調査

（2）通勤・通学の状況

- 本市の2020(令和2)年の通勤・通学の状況を見ると、流入は錦町、あさぎり町、山江村の順に、流出は錦町、あさぎり町、相良村の順に多く、2,685人の流入超過となっています。
- 昼夜間人口比率は、108.8%と熊本県平均（103.1%）を上回っており、人吉市は、人口減少下においても人吉・球磨地域における拠点性を維持しています。

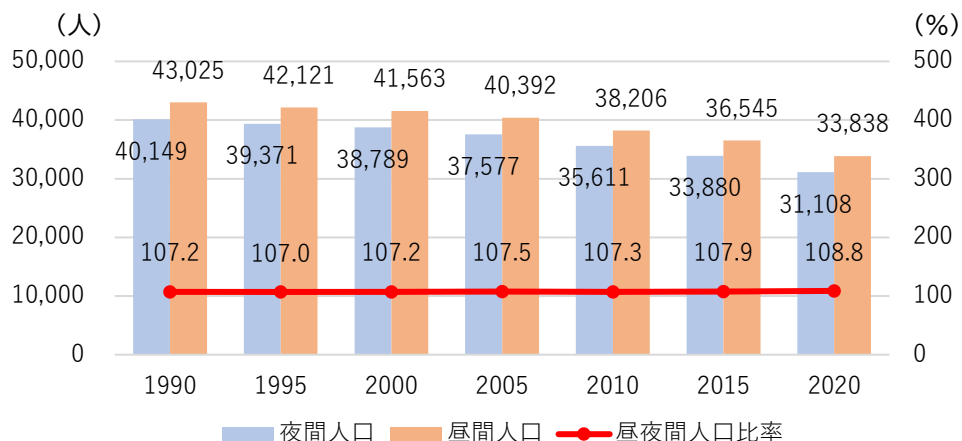
■通勤・通学の状況

市内への流入者数：5,976人				市外への流出者数：3,291人			
順位	市町村名	人数	割合	順位	市町村名	人数	割合
1位	熊本県錦町	1,508人	25.2%	1位	熊本県錦町	1,031人	31.3%
2位	熊本県あさぎり町	1,124人	18.8%	2位	熊本県あさぎり町	551人	16.7%
3位	熊本県山江村	696人	11.6%	3位	熊本県相良村	375人	11.4%
4位	熊本県相良村	571人	9.6%	4位	熊本県多良木町	243人	7.4%
5位	熊本県多良木町	512人	8.6%	5位	熊本県山江村	189人	5.7%
6位	熊本県球磨村	422人	7.1%	6位	熊本県球磨村	176人	5.3%
7位	熊本県熊本市	253人	4.2%	7位	熊本県八代市	110人	3.3%
8位	熊本県湯前町	172人	2.9%	8位	熊本県熊本市	97人	2.9%
9位	熊本県八代市	130人	2.2%	9位	宮崎県えびの市	66人	2.0%
10位	熊本県水上村	86人	1.4%	10位	熊本県五木村	60人	1.8%
	その他	502人	8.4%		その他	393人	11.9%



資料：令和2年国勢調査

■昼夜間人口の推移

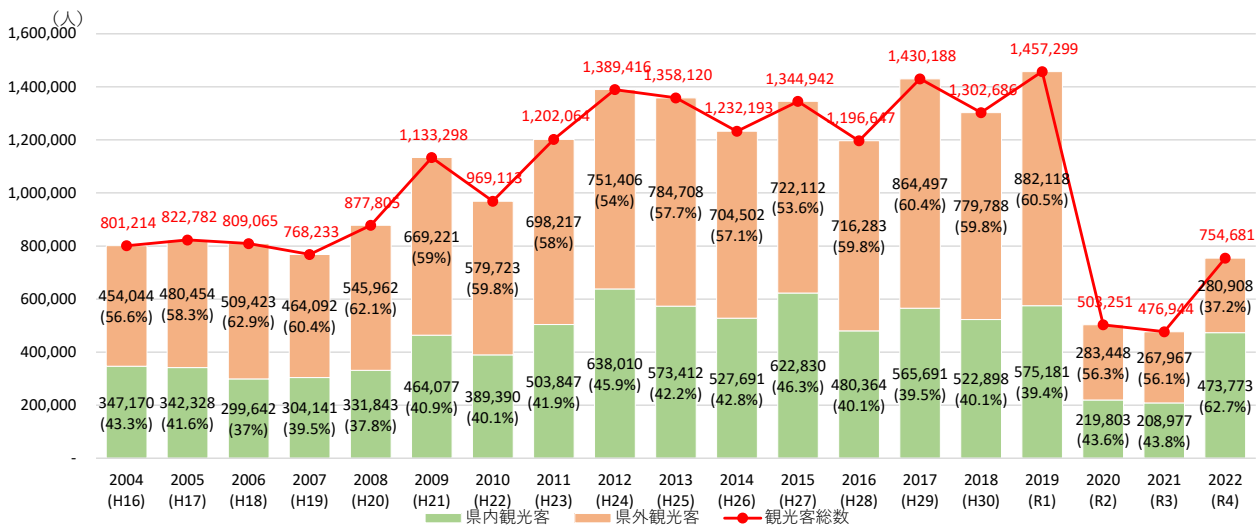


資料：国勢調査

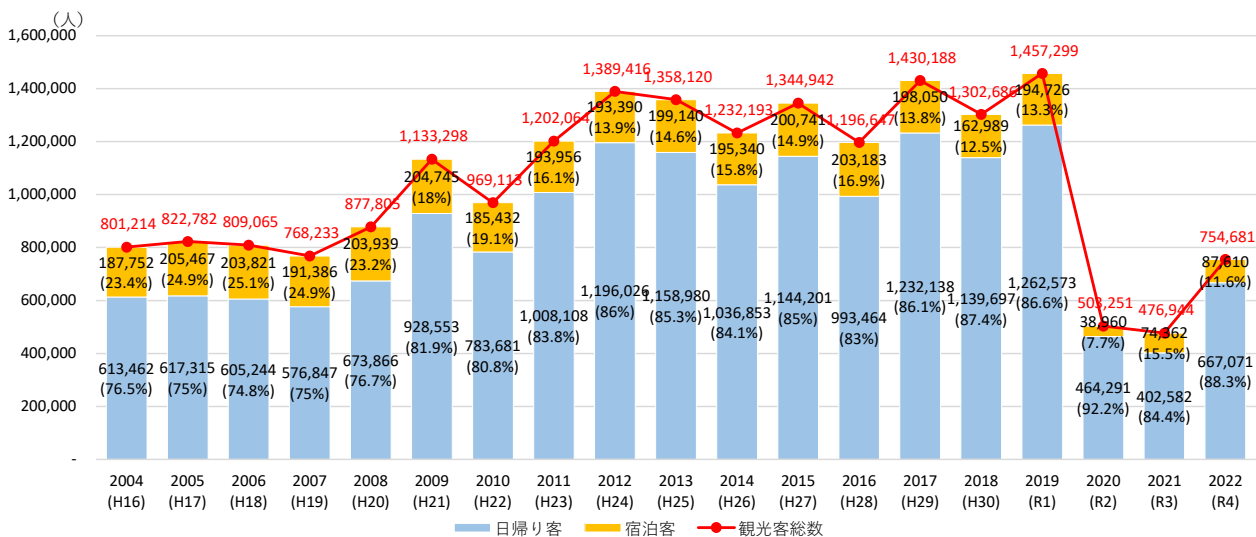
3) 観光

- 観光客数は、災害前の 1,457,299 人から、2021(令和 3)年には 476,944 人まで減少し、新型コロナウイルス感染症の拡大が落ち着いた 2022(令和 4)年は 754,681 人に増加し、災害前の約半分まで回復しました。
- ただし、熊本市や宮崎県の主要都市はコロナ禍前の水準まで回復していることを勘案すると、回復が遅れていると言えます。
- 観光客の内訳は、日帰り客が約 8～9 割で、宿泊客は全体の 1 割程度にとどまっています。
- 県内/県外の内訳は、災害前よりも県内観光客の割合が高くなっており、要因として、鉄道網が復旧していないことや人吉駅まで乗り入れる高速バスの本数が限られており、人吉 IC 止まりであることが考えられます。
- 熊本県内に宿泊する外国人延べ 1,000,531 人のうち、人吉・球磨地域の宿泊者数は 16,473 人で、県全体の 1.6%にとどまっています。

■県内外観光客数の推移

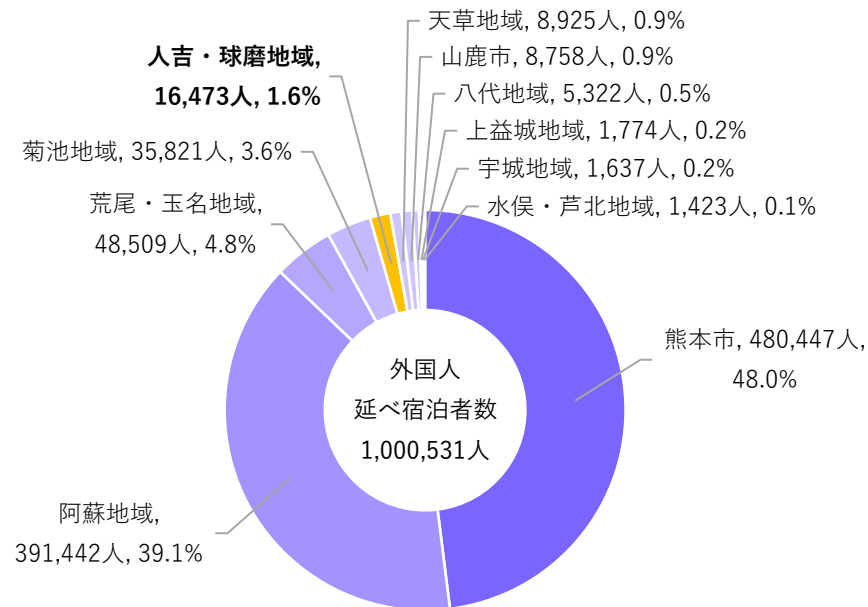


■日帰り・宿泊観光客数の推移



資料：人吉市統計年鑑（市観光振興課「県観光統計表」）

■外国人延べ宿泊者数における地域別構成比（令和5年）



資料：令和5(2023)年熊本県観光統計表

第3章 人吉市の特性

1 人吉市の強み

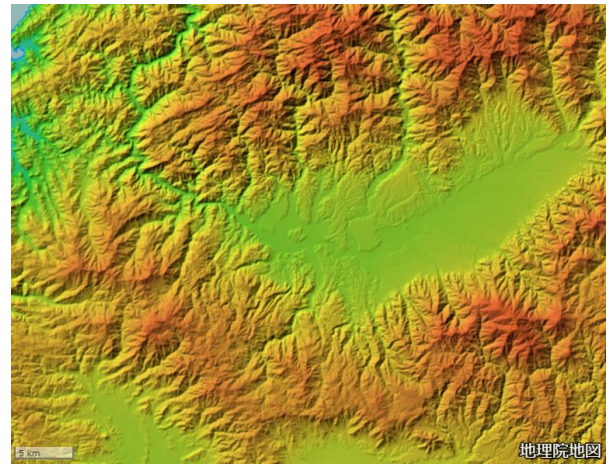
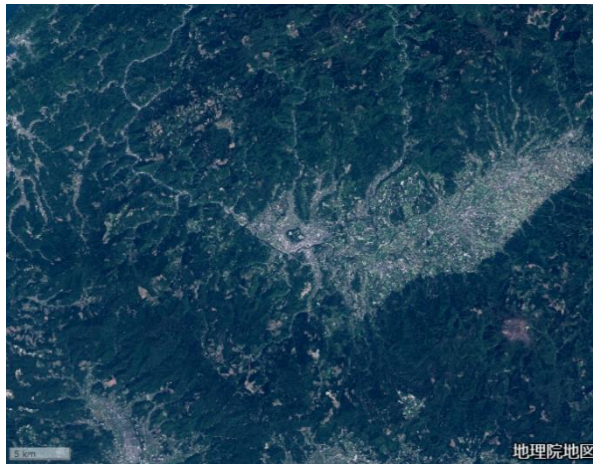
1) 地勢、自然環境の恵み

（1）地勢

本市は、熊本県の最南部、周囲を高い九州山地に囲まれた人吉盆地（東西約 30km、南北約 15km）の西南端に位置し、市境は、鹿児島、宮崎の両県に接しています。

人吉盆地のほぼ中央を日本三急流の一つである球磨川が東西に貫流しており、市内では万江川・山田川・鹿目川・胸川など多数の支流が球磨川へ流れ込んでいます。

■人吉盆地周辺の地形



図出典：国土地理院（左：空中写真、右：色別標高図）

（2）米

人吉・球磨地域は熊本県内でも有数の歴史ある稲作地帯で、江戸時代の中期には、2万2000石の朱印高に対して、4万石以上のお米の生産高があったと言われています。

球磨川から湧く豊富な水資源や盆地特有の寒暖差の大きさなど稲作に適した土地であるとともに、九州山地に囲まれているため、外部から米の搾取を受けなかったことも稲作文化の発展に影響したと言われています。

江戸時代中期には幸野溝と百太郎溝が完成し、人吉藩の農業生産が向上しました。この2つの灌漑用水は、世界かんがい施設遺産にも登録されています。

近年では、米の消費量低下に伴う生産調整廃止等の影響により、水田を使った加工用米（酒米含）、野菜を中心とした転作作物の栽培、水田収益力強化に向けた二毛作が進んでいます。

（3）茶

人吉・球磨地域は熊本県最大のお茶の産地です。

朝霧と寒暖差に恵まれ、相良村を中心に大規模な茶団地が形成されています。

相良藩では、米以外にも四木（楮、絹、漆、茶）が年貢として納められ、茶は約1,000年前に領主に献上された歴史もあります。

現在は、最良品種「さえみどり」を用いた^{たまりよくちや}玉緑茶を生産しています。

2) 歴史的な歩み

(1) 相良 700 年の歴史

鎌倉時代初期に鎌倉幕府の地頭として、遠江国（現在の静岡県）から相良氏が入国しました。

以後、相良氏は、幾多の戦乱を経つつも、明治維新までの約 700 年間、この地方の大名として一貫してこの地を治めてきました。このように鎌倉時代以来、一つの武家が同じ地域を支配し続けた例は、全国でも薩摩の島津氏のほかわずかしきありません。

相良氏は、領地を広げる中で、旧来の豪族が治めていた土地に根付いていた文化、建造物、心のよりどころとなるものを認め、寛容に受け入れてきました。

そのため、本市には国宝・青井阿蘇神社や国指定史跡の人吉城跡をはじめ、相良氏統治以前の文化財も含め、数多くの重要文化財が存在しています。

神社・仏閣、古い町並みなどが点在しており、今もなお落ち着いた城下町のたたずまいを残しています。

また、人吉・球磨の人々の気質は「人吉・仲良し・こころ良し」と称されます。

これは、相良家による鎌倉仏教文化から生まれた「祈りの里」としてのおだやかでだらかであたたかな気性を表しています。

このように、領主と民衆が心をひとつにして、地域の文化を守り、新しいものを取り入れ、独自の文化として昇華してきた相良 700 年の歴史のストーリー性が評価され、2015(平成 27)年 4 月 24 日には近隣の球磨郡の各町村と並んで「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化 ～日本でもっとも豊かな隠れ里一人吉球磨～」が日本遺産に認定されました。

作家・司馬遼太郎は、著書「街道をゆく」の中で、人吉・球磨地域のことを“日本でもっとも豊かな隠れ里”と記しており、日本遺産の登録の一助になっています。

また、人吉のまちは盆地の自然景観や、歴史的な町並みやたたずまいから「小京都」と称されました。

本市は、1985(昭和 60)年に京都とゆかりのまちが連携して、まちのイメージアップと観光客誘致を図ることを目的として結成された全国京都会議にも加盟しています。



（２）鉄道

本市では、1908(明治 41)年に肥薩線の八代－人吉間（川線）、1909(明治 42)年に人吉－吉松間（山線）が開通し、1924(大正 13)年には湯前線として人吉-湯前間が開通し、それまでの球磨川の舟運や人吉街道を利用した物流に大きな変革をもたらしました。（湯前線は、1989(平成元)年に後の第三セクターのくま川鉄道に転換されました。）

また、肥薩線の開通が産業近代化に大きく貢献したことから、市内の大畑駅や矢岳駅、人吉機関車庫など肥薩線に関係する施設が、2007(平成 19)年に経済産業省が取りまとめた「近代化産業遺産群 33」の「九州南部における産業創出とこれを支えた電源開発・物資輸送の歩みを物語る近代化産業遺産群」の物資輸送関連遺産となっています。

さらに、2017(平成 29)年には(一社)日本イコモス国内委員会の「日本の 20 世紀遺産 20 選」に、人吉機関車庫や矢岳第一トンネル等を構成資産とする肥薩線が選定されています。

水害以前は、SL 人吉をはじめ、いさぶろう号・しんぺい号（人吉－吉松間）、特急かわせみやませみ（熊本－人吉間）、田園シンフォニー（人吉温泉－湯前間）などの観光列車が運行していました。

また、国内唯一の現役石造鉄道車庫である人吉機関車庫、ループ線とスイッチバックを併せ持つ大畑駅など見どころが多いことから、鉄道のまちとして広く知られています。

2015(平成 27)年には、これら日本の鉄道史に残る文化遺産の歴史や文化的価値を伝えるため、人吉駅の隣接地に「人吉鉄道ミュージアム MOZOCA ステーション 868」を開業し、肥薩線に関する写真や展示、映像を通じて、その魅力を伝えています。

令和 2 年 7 月豪雨では J R 肥薩線、くま川鉄道ともに甚大な被害を受け、今もなお J R 肥薩線の八代～吉松間、くま川鉄道の人吉温泉－肥後西村間では運休が続いています。

くま川鉄道は 2026(令和 8)年度上半期内に全線再開が見込まれており、J R 肥薩線も、八代-人吉間については 2033(令和 15)年度の復旧に向けた熊本県と J R 九州の最終合意がなされました。（令和 6 年度末）

2024(令和 6)年には、国内で現役最古の蒸気機関車として活躍し、2024(令和 6)年 3 月に引退した SL 人吉（ハチロク）の譲渡を受け、同年 11 月より一般公開を行っています。



（3）水害との戦い

球磨川流域は、人吉・球磨盆地が急峻な山々に囲まれたすり鉢状の地形で、複数の急流支川が流れ込んでいます。

また、さらに盆地の下流側が山間狭窄部となり、豪雨時には水位が上昇しやすい地形となっており、度重なる洪水被害に見舞われてきました。

熊本測候所編の「肥後の風土誌」によれば、869(貞観 11)年にはすでに、球磨川で大洪水が発生したとの記録が残されており、記録に残っているだけでも過去 400 年余りの間に 100 回以上もの水害が記録されています。

戦後も、1965(昭和 40)年 7 月、1971(昭和 46)年 8 月、1972(昭和 47)年 7 月、1982(昭和 57)年 7 月などに洪水が発生しており、特に、1965(昭和 40)年 7 月洪水では甚大な被害が発生し、市内では市街地の 3 分の 2 が浸水するとともに、多くの家屋が流出しました。人吉水位観測所では計画高水位（5.12m）を大幅に上回る 6.70m の水位を記録し、青井阿蘇神社では楼門の基礎石のところまで水が押し寄せる大洪水となりました。

このように、球磨川流域は度重なる水害に見舞われてきましたが、そのたびに復旧・復興を遂げてきました。



人吉市九日町(昭和 40 年 7 月) 出典：九州地方整備局 八代河川国道事務所

この度の令和 2 年 7 月豪雨では、短時間の急激な豪雨により、球磨川本流や支流の各所において堤防決壊、越水、排水路、用水等の内水氾濫等による大規模な浸水被害が市内の広範囲で発生し、護岸の崩落、橋りょう流失、道路の損壊、鉄道の損壊など多岐に渡り甚大な被害となりました。

■令和2年7月豪雨の被害状況

発生年月日・原因	被害状況	
令和2年7月3日～7月4日 梅雨前線・豪雨 再考推移 6.9～7.6m	死者	21人
	負傷	17人
	全壊	902戸
	半壊	1,452戸
	一部損壊	308戸
	非住宅被害	1,946棟
	福祉施設	319,613千円
	衛生施設等	5,241,987千円
	商工被害	27,904,790千円
	農作物等被害	125,824千円
	農業施設	3,000千円
	農地等被害	9,200,000千円
	林業関係被害	704,132千円
	公共土木施設	11,702,066千円
	都市施設等	656,262千円
	公立文教施設等	747,880千円

出典：令和6年度人吉市地域防災計画書・水防計画書



3）自然の恵み・歴史とともに育んできたなりわい

（1）人吉温泉

人吉温泉の歴史は古く、開湯時期は不明ながら、1492(明応元)年に相良家 12 代当主^{ためつぐ}為続が湯治をしたという記録が残っています。

現在も温泉町には湯の神社や湯の元観音があり、その歴史を感じさせます。

人吉温泉は 1910(明治 43)年に翠嵐楼が温泉掘削に成功したのが始まりで、鹿児島線（現肥薩線）の全線開通や球磨川くだりの開始とタイアップして林温泉の名は広く知られ、大正期にかけて全盛期を迎えました。

人吉市の中心部では、1929(昭和 4)年の中央温泉を皮切りに、1940(昭和 15)年までに 21 カ所が開削され、その後泉源は 31 カ所になり、林温泉を含めて人吉温泉と称するようになりました。

人吉温泉の泉質は弱アルカリ炭酸泉等で、しっとりとした優しい肌触りが特徴であり「美人の湯」と称されています。球磨川沿いを中心に旅館や公衆浴場が点在し、泉源の数は 50 を超えます。

現在、市内の温泉施設は 27 軒で、公衆浴場の他、多くの旅館・ホテルでも立ち寄り湯を楽しむことができます。

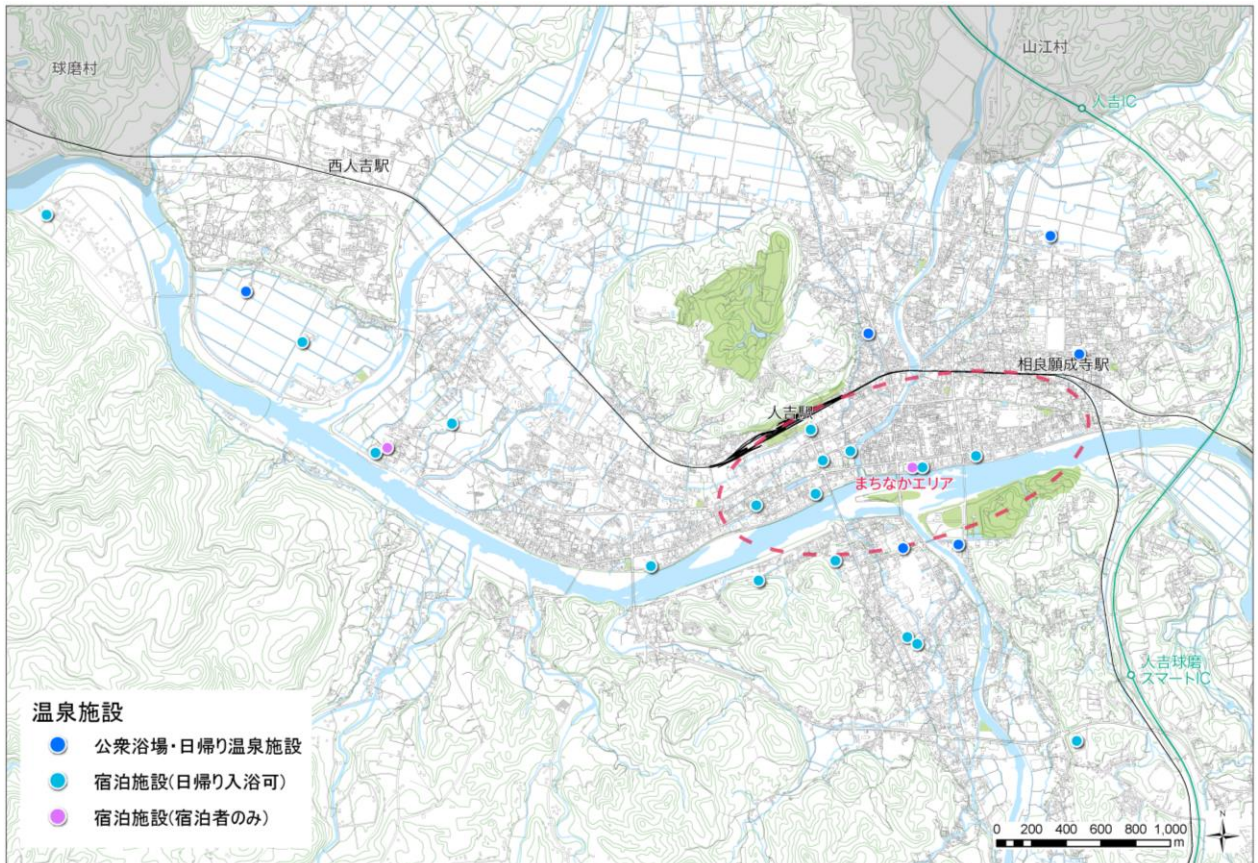


■市内の温泉施設

施設タイプ		施設数
宿泊施設	宿泊のみ	2
	日帰り入浴可	16
公衆浴場・日帰り温泉施設		9※
合計		27

※休業中1軒を含む

■温泉施設の分布



（２）球磨焼酎

球磨焼酎は、盆地特有の寒暖の差が激しい気候と風土が育む豊かな大地により作られた良質な米と清らかな水を用いて、丹精に造られた蒸留酒です。

およそ 500 年前から人吉球磨地域の産業として発展してきました。

熊本県内の北側は日本酒圏、南側が球磨焼酎圏と知られていますが、これは南部が約 700 年間相良氏に支配されたことで、熊本藩とは文化的にも独立していたことが影響しています。

室町時代に、相良氏が東南アジアや対立と活発な交易を行う中で蒸留技術が伝わり、さらに、文禄・慶長の役で大陸から新しい蒸留技術が伝わったことで、現在に伝わる球磨焼酎の製法がほぼ完成したとされています。

江戸時代には人吉球磨地域で盛んに製造されるようになりましたが、当時は、貴重な米を原料とする米焼酎は上流階級の武士に飲まれ、庶民は大麦や雑穀を原料とする自家製焼酎を飲んでいました。

1995(平成7)年には、国税庁によって「球磨焼酎」が定義され※、「地域的表示の産地指定」を受けると一気にブランド化し、球磨地方以外にも多くの愛飲者を獲得しました。

※定義：米のみを原料として人吉・球磨の地下水で仕込んだもろみを人吉・球磨で蒸留し、瓶詰した焼酎

球磨焼酎の蔵元は、江戸期の 1657 年に酒造株制度が開始され、醸造販売が認められた蔵元は 20 軒でした。

明治期（1871 年）には酒造株制度が廃止され、届け出れば誰でも酒造可能となったことで、約 60 軒が群立しました。

大正期（1923 年）には 53 軒で製造され、現在は個性ある 27 の蔵元（人吉市内 8 蔵元）が酒造りを続けています。

各蔵元は複数の個性ある銘柄を持ち、その数は 200 種以上に上ります。

こうした多彩な焼酎を活かし、2020(令和2)年3月には、球磨焼酎を通じ、焼酎蔵とその周辺地域の観光振興及び経済的発展に寄与することを目指し、蔵元、卸売店、宿泊施設、交通事業者などで構成する「球磨焼酎蔵ツーリズム協議会」が発足しました。

■蔵元の所在地と銘柄数

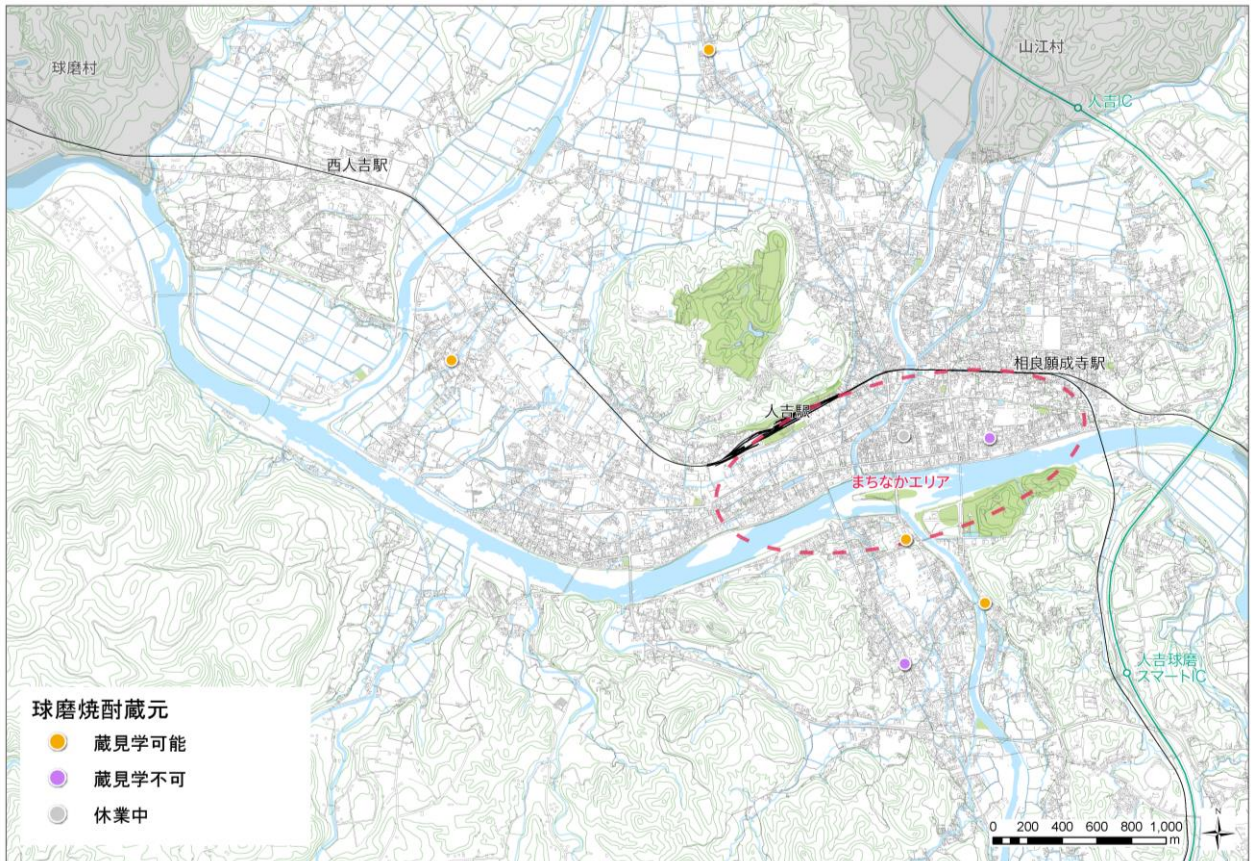
所在地	製造工場数	銘柄数
人吉市	9	104
多良木町	6	93
あさぎり町	5	91
錦町	2	17
水上村	2	41
湯前町	2	49
球磨村	1	2

資料：人吉市統計年鑑（球磨焼酎酒造組合）



図出典：球磨焼酎酒造組合ホームページ
(<https://kumashochu.or.jp/wp/>)

■蔵元の分布



（3）球磨川くだり

球磨川の舟運は、江戸時代（1664(寛文4)年）に舟路が開削されて以来、参勤交代にも利用されるなど、人吉・球磨地域の交通と物流に欠かせないものでした。

舟運は1908(明治41)年に肥薩線（八代－人吉間）が開通されるまで盛んに行われ、鉄道の登場により衰退していましたが、その後「球磨川くだり」として生まれ変わりました。

球磨川くだりは、1910(明治43)年に翠嵐楼の創業者が川舟を活用した観光遊覧船を事業化したのがはじまりとされています。

以降、旅館が宿泊客の希望に応じて貸し切り舟を運航していましたが、1927(昭和2)年、観光への関心の高まりを受けて、球磨川くだりの定期船の運航が開始されました。

1932(昭和7)年には与謝野鉄幹・晶子夫妻も人吉に訪れ、球磨川くだりを楽しんだとされています。

その後、戦時中の中断や水難事故による事業内容の見直しなどを経て、1963(昭和38)年に人吉観光株式会社（現・球磨川くだり株式会社）を設立し、現在まで川下りの文化が受け継がれています。

令和2年7月豪雨災害では発船場や船舶、運搬・送迎用車両等に壊滅的な被害を受けましたが、2021(令和3)年7月には観光拠点施設「HASSENBA」として再生しました。

現在は、短縮区間による運航再開などを経て、HASSENBA（人吉発船場）～温泉町着船場の4.5kmを下っていく「清流コース」、人吉城跡の石垣を間近で眺め、風情ある遊覧体験のできる「梅花の渡し」を運航しています。



球磨川くだり（清流コース）



球磨川くだり（梅花の渡し）

図出典：球磨川くだりホームページ (<https://www.kumagawa.co.jp/>)

4) 教育プログラム

①一井正典「青雲の志」育成事業

本市では、明治・大正・昭和の三天皇の侍医を務めた人吉市の偉人である一井正典の足跡を辿る中で、一井氏と同じように志を高く持ち、グローバルな人材を育成することを目的に、2013(平成 25)年から高校生を米国に派遣する「青雲の志」育成事業を行っています。(コロナ禍以降一時中断)

②ひとよしくま熱中小学校

2021(令和 3)年、「もういちど 7 歳の目で世界を…」をテーマに全国で活躍する一流の起業家・経営者・大学教授らが先生となって授業を展開する”学びたい大人の社会塾”、「ひとよしくま熱中小学校」が誕生しました。(運営：一般社団法人ドットリバー)

高校生から 80 歳代までこれまで 170 名以上の生徒が入学し、現在第 8 期の始業(2025 年 4 月開校)を予定しています。

③県立高校の地域連携

人吉・球磨地域には、4 つの高等学校が立地し、各校とも特色ある学科を設けています。そのうち、人吉高校及び球磨工業高校の 2 校が人吉市内に位置しています。

球磨工業高校では、人吉・球磨地域内の社殿の新築(伝統建築専攻科)や、球磨川くだりの川舟で使用する舟くぎの製作(機械科)、2022(令和 4)年 5 月に開庁した新市庁舎で使用する木製ベンチと案内板のピクトグラムの製作(建築科)など、地域と連携した実績的な学習活動が行われています。

人吉高校では、令和 4 年度から文部科学省より「新時代に対応した高等学校改革推進事業(創造的教育方法実践プログラム)」の研究指定を受け、令和 2 年 7 月豪雨災害からの創造的復興を担う人材の育成を目指し、地域課題の解決に向けた探求活動等において、オンラインによる都市部の大学や研究機関、企業等との連携に向けた新たな教育資源の確保に関する研究や、VR や AI 等の先端的な技術を有効活用する教育方法の開発等に取り組まれています。

また、人吉高校及び球磨工業高校のカヌー部は、球磨川を使ってトレーニングをし、熊本県代表として全国大会でも入賞しています。

5) コンパクトで多様な顔を持つまちなか

本市は、人吉球磨地域の主要施設が集積する、暮らしと観光の拠点都市であり、2024(令和6)年には東洋経済新報社の「住みよさランキング2024」で総合1位を獲得しました。

「住みよさランキング」は、安心度、利便度、快適度、富裕度の4つの観点から20項目のデータを使って算出されるもので、人口規模に対して飲食店が多く、人吉温泉や球磨川下りができる自然豊かな観光資源を有することが特徴として挙げられています。

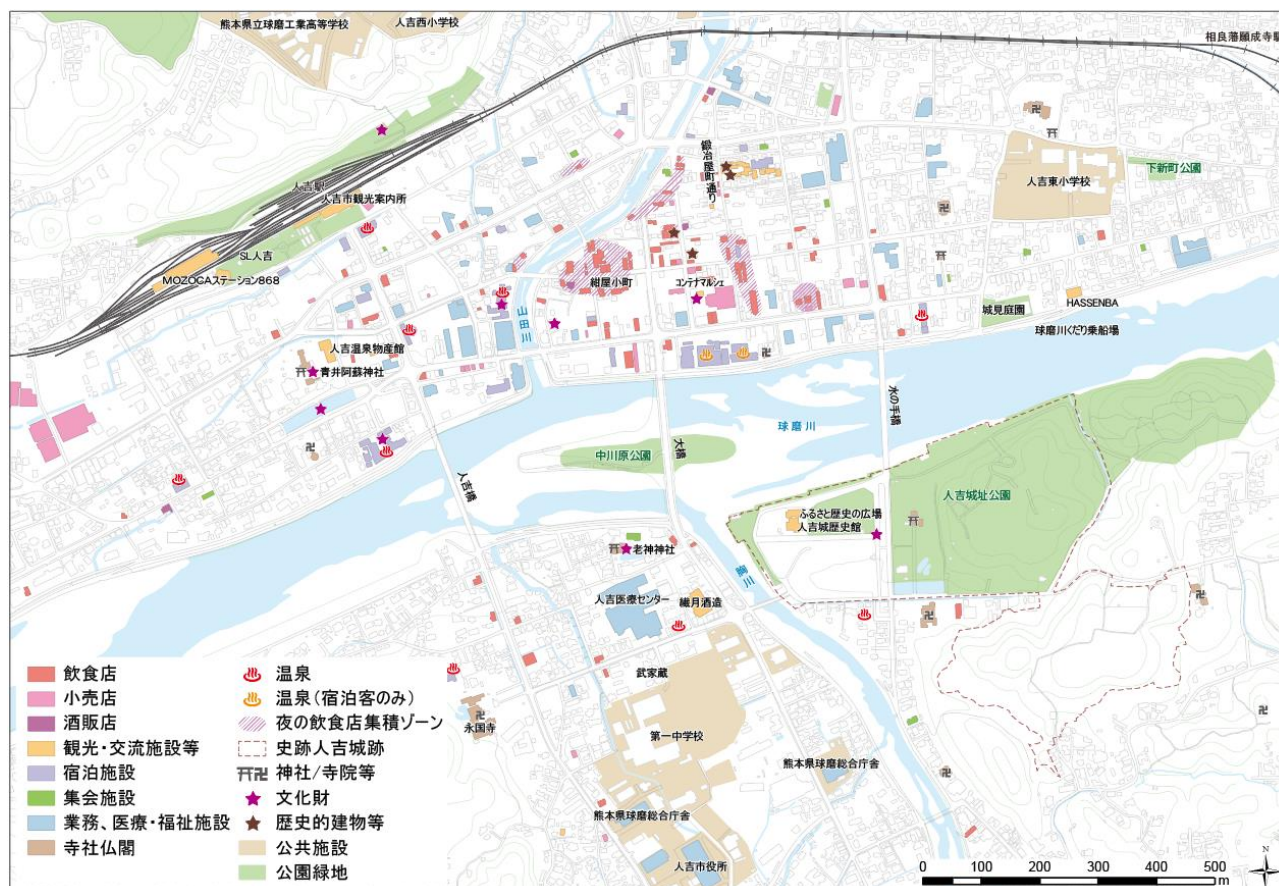
特に、まちなかエリアは人吉駅の概ね1km圏に旅館・ホテル、繁華街、温泉施設等が集積し、エリア内～周辺部に史跡や文化財等の歴史資源が点在しています。

市民生活面でも、スーパーや飲食店などの商業施設、銀行・郵便局などの業務施設、病院・福祉施設などの都市機能が立地し、一定の暮らしやすい環境を形成しています。

また、昔ながらの町割り（短冊状の敷地）が残っているため、歩行者が比較的安心して歩ける交通ネットワークが形成されており、徒歩や自転車でも回遊しやすい観光地を形成しています。

さらに、街並みの中に公衆浴場や石蔵、味噌・醤油蔵、焼酎蔵等の歴史的建物が今も残っています。

■まちなかエリアの資源分布



2 人吉市を取り巻く環境

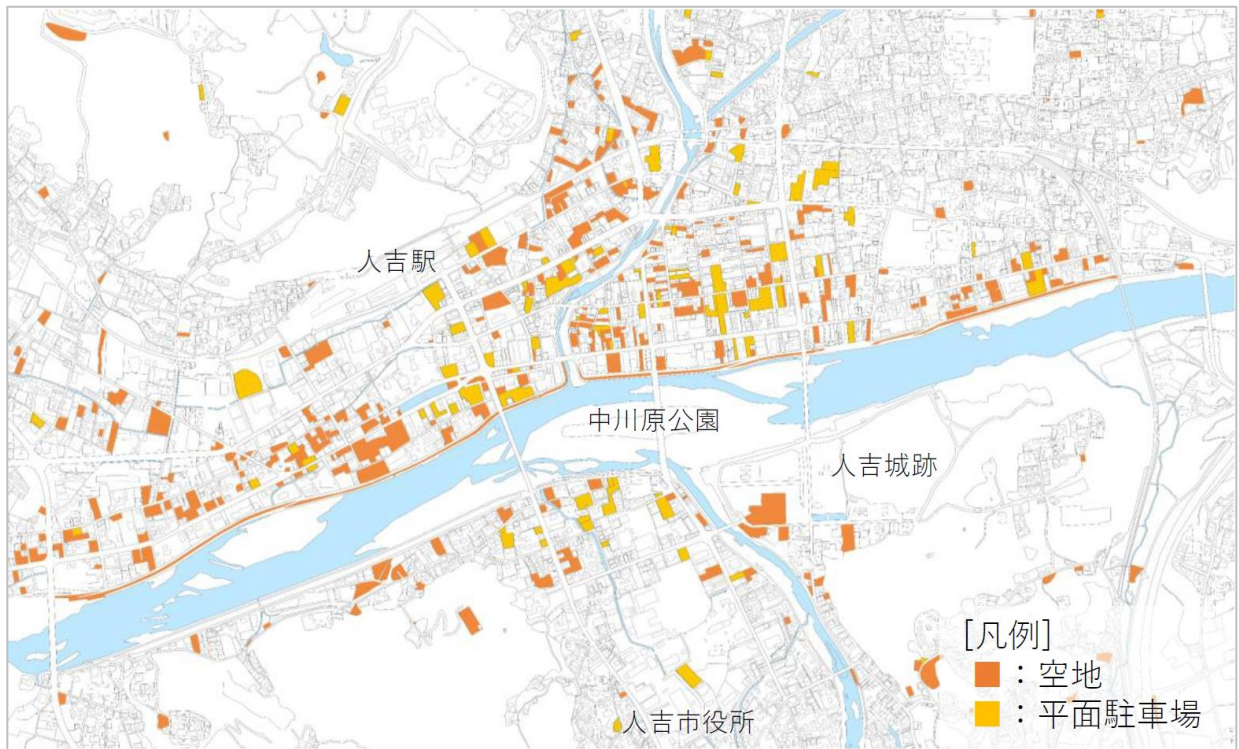
1) 郊外の利便性とまちなかの衰退

まちなかエリアでは、災害後の建物解体により空き地が増加し、暫定利用の駐車場等を含めた低未利用地が広く分布するなど、空洞化が進行しています。

一方、周辺地域では災害以前から国道などの幹線道路沿線に大規模小売店舗等が立地し、生活利便性が高まっています。

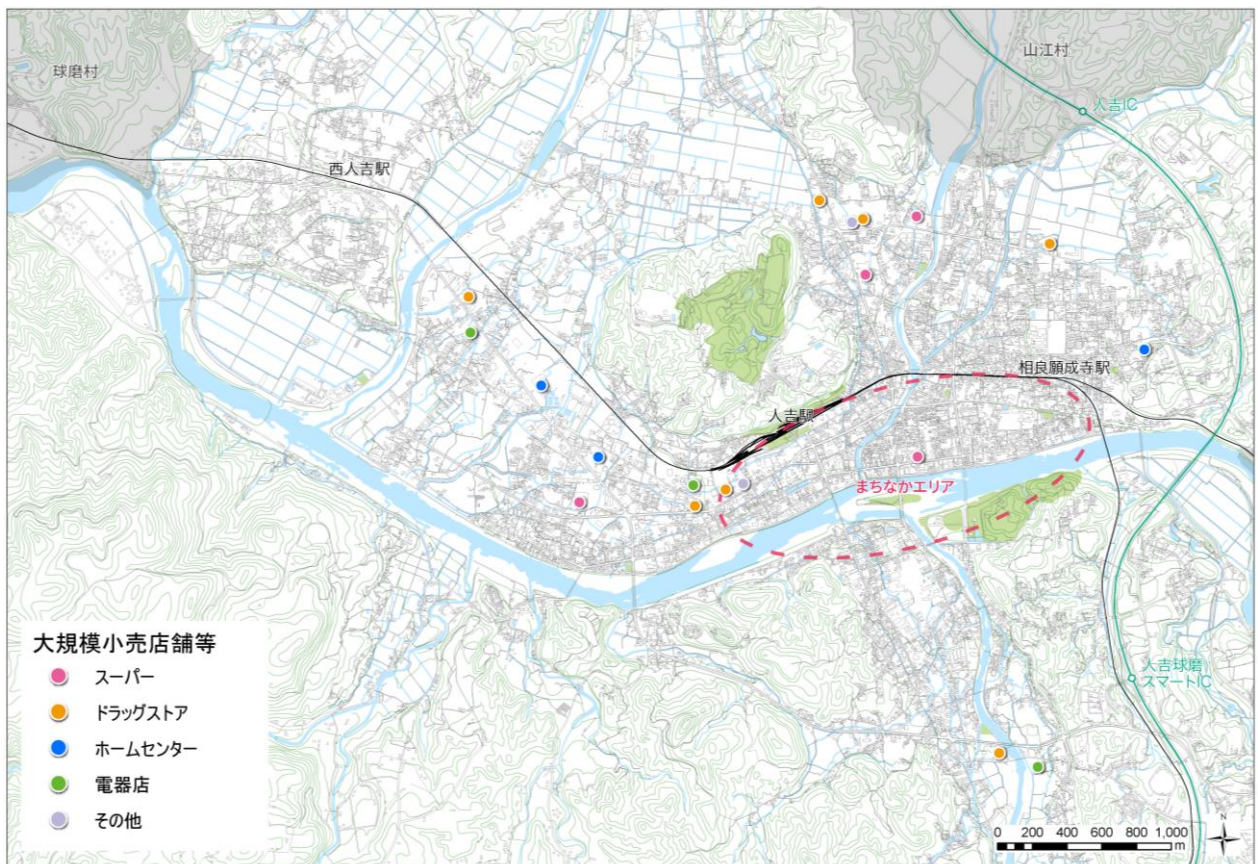
従来からの課題であったものの、被災による鉄道運休が相まってまちなかへアクセス可能な公共交通が少なく、自家用車での移動割合が高くなっています。

■まちなかエリアの低未利用地（空き地、駐車場）の分布（令和5年度時点）



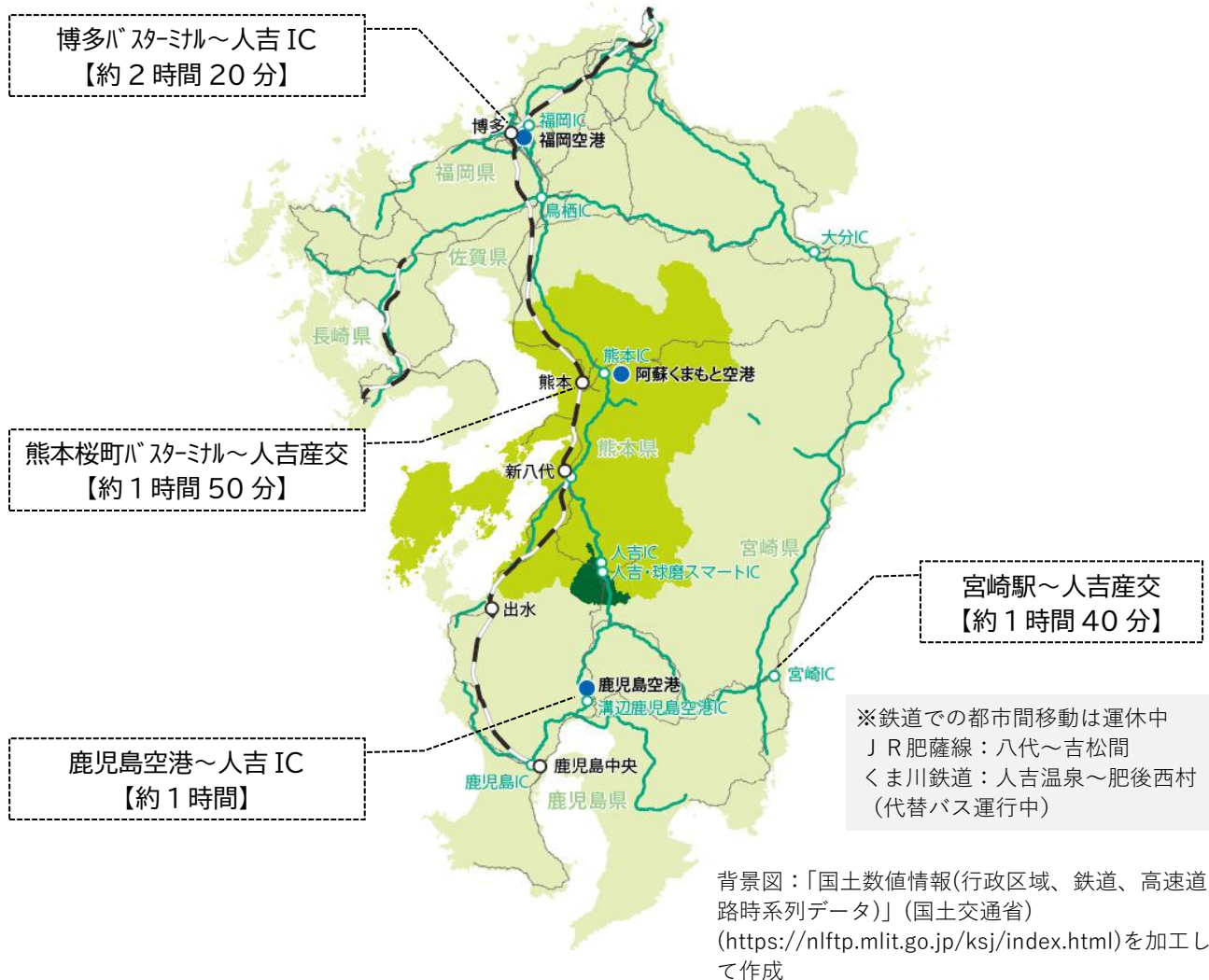
資料：人吉市まちなかグランドデザイン推進アクションプラン

■大型小売店舗等の分布



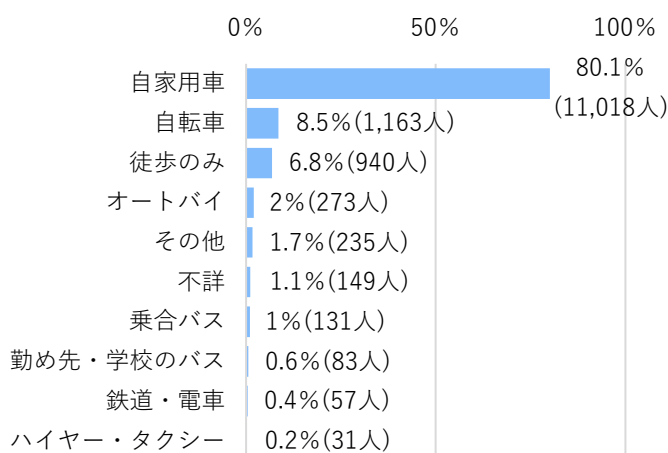
資料：熊本県 大規模小売店舗立地法届出状況（令和6年12月末現在）

■人吉市へのアクセス手段

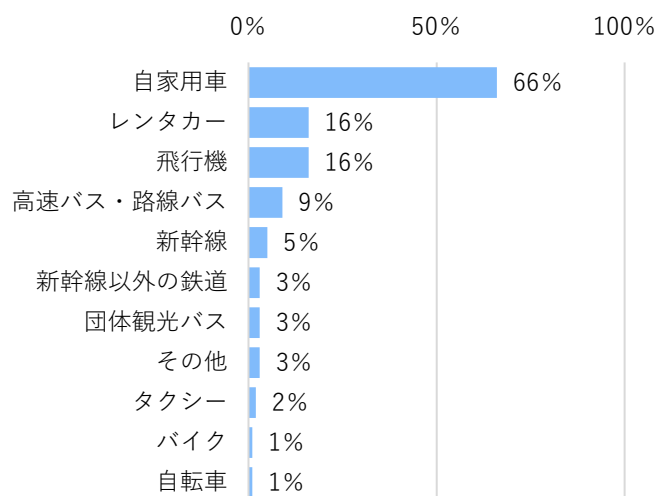


■交通の分担率

【通勤・通学の交通手段】※1



【観光の交通手段】※2



資料：※1 従業地・通学地(人吉市)による、利用交通手段別通勤者・通学者数(15歳以上)[複数回答可]/令和2年国勢調査

※2 出発地から人吉球磨地域に来るまでに利用した交通手段[複数回答可]/令和5年度人吉球磨観光実態調査(一般社団法人 人吉球磨観光地域づくり協議会)

独自の歴史や文化に培われた豊富な観光資源を持ちながら、市内では、温泉地ならではの日帰り入浴や湯めぐり、まちの文化体験、特産品を味わえる場所や土産物を購入できる場など、観光地としての分かりやすい情報発信や文化体験できる機能や環境が十分でない面があります。

宿泊施設・飲食店等が集積するまちなかでは、地元の食や温泉などを楽しみながらそぞろ歩
きできる環境が十分に整っておらず、スナック街などナイトエンターテインメントを体験でき
る機能は存在するものの、昼間にまちの文化体験をエンターテインメント的な要素を持って体
験できる機能が不足していることなどが挙げられます。

**主な観光体験施設
お土産物屋**

- 飲食店
- 小売店
- 酒販店
- 観光・交流施設等
- 宿泊施設
- 寺社仏閣
- 公園緑地

温泉

- 温泉(宿泊客のみ)
- 夜の飲食店集積ゾーン
- 神社・寺院等
- 文化財
- 歴史的建物等
- シェアサイクルポート
- レンタサイクル
- 球磨川くだり

相良薄願成寺
下新町公園
HASSENEA
城見庭園
球磨川(弓)乗船場
人吉城址公園
ふるさと歴史の広場
人吉城歴史館
水の手橋
球磨川
中川原公園
武家蔵
徳月酒造
老神神社
永国寺
山田川
人吉温泉産物館
青井阿蘇神社
SL人吉
MOZOGASTATION868
人吉市観光案内所
人吉駅

0 100 200 300 400 500 m

3) 宿泊施設の偏り

市内の主な宿泊施設は旅館とビジネスホテルが中心で、やや富裕層向けの観光客とビジネス利用者をターゲットとした施設がほとんどです。

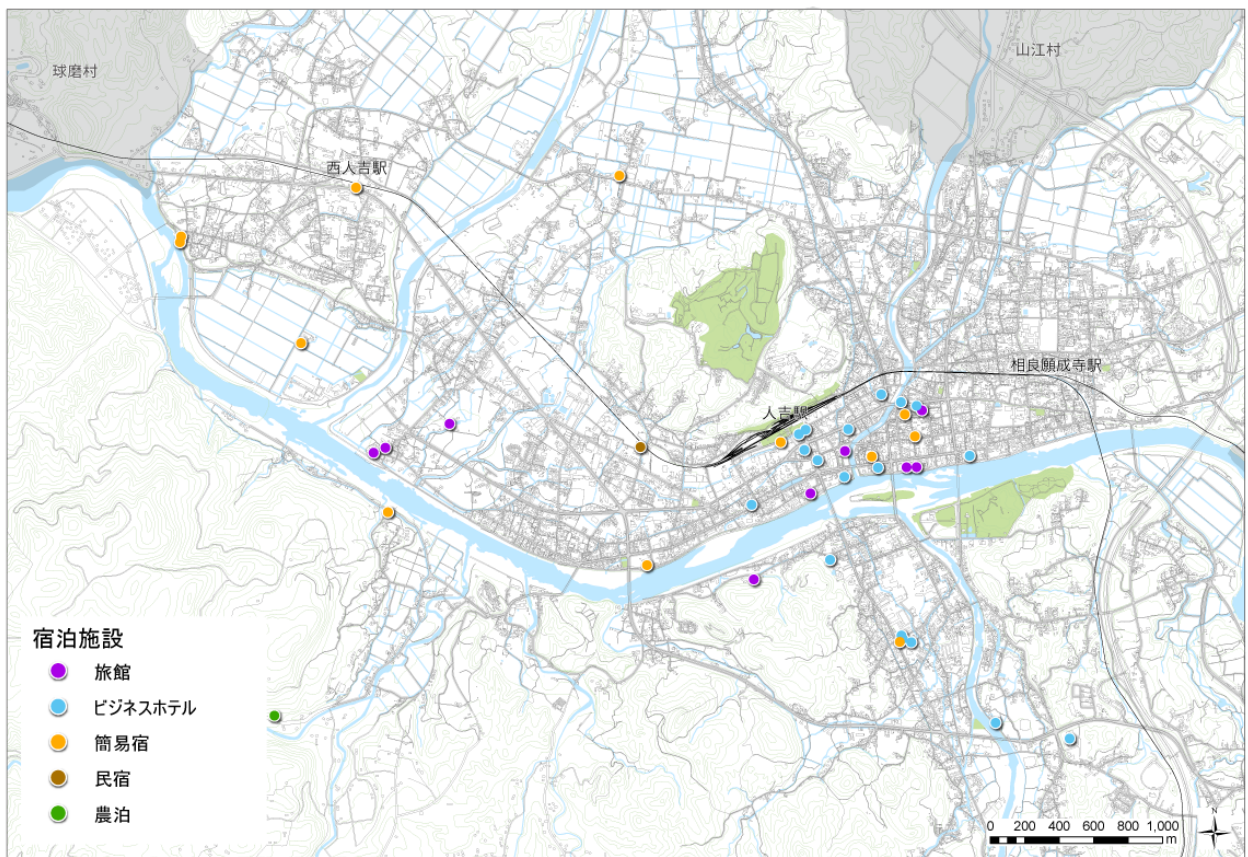
近年では新たなゲストハウス等の立地がみられますが、若年層向けの旅を楽しむための宿泊施設や、近年のホテルトレンドである、まちの文化を楽しむライフスタイルホテルが少ない状況にあります。

■市内の宿泊施設

種類	施設数	定員
旅館	10	708
ビジネスホテル	18	776
簡易宿	12	154
民宿	1	12
農泊	2※	7※
合計	43	1,657

※休業中1軒を含む

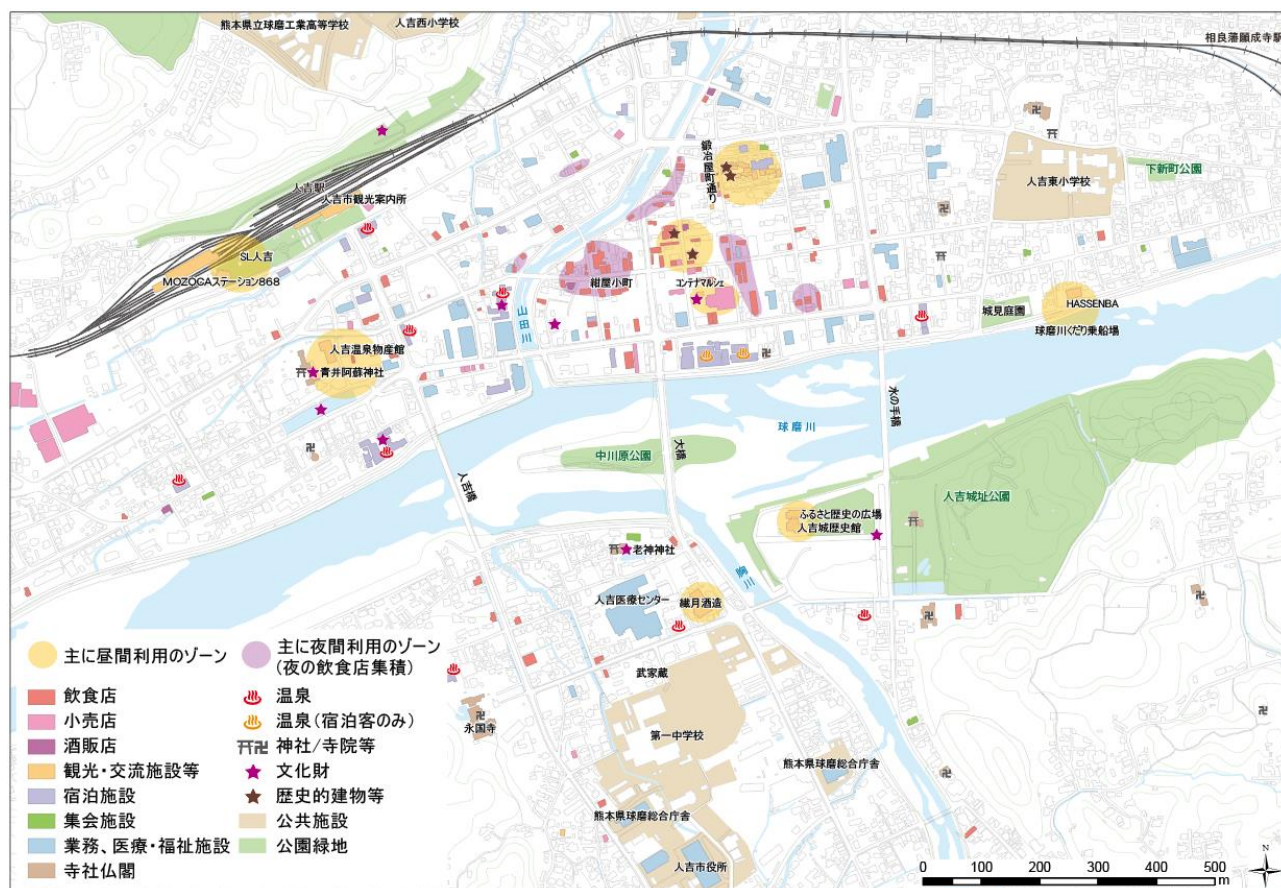
■宿泊施設の分布



4）まちなかの市民の暮らしや交流を支える機能の不足

まちなかエリアは、九州の奥座敷として、夜間の性格が強い繁華街として発展しており、災害後から現在までにコンテナマルシェの設置やスーパーの再建、人吉紺屋小町の開業などによりまちの再生の兆しがあるものの、子育て世帯やファミリー層、中高生をターゲットとした教育や文化、交流施設は少なく、旅館業や病院等の従業員向けの昼間の飲食を提供するサービス等も少ない状況です。

■まちなかエリアの昼間/夜間の土地建物利用分布



第4章 復興まちづくりの進捗

1 流域治水プロジェクトによる安全性の担保（広域土木関連）

1) 流域治水プロジェクトの概要

令和2年7月豪雨で甚大な被害が発生した球磨川水系については、流域のあらゆる関係者が協働し、気候変動による水害の激甚化・頻発化に備えつつ早急な地域社会の復興に向け、まちづくりと連携したスピーディな流域治水対策を進めるため、球磨川流域治水協議会において、「球磨川水系流域治水プロジェクト」（以下「流域治水プロジェクト」という。）が取りまとめられました（2021(令和3)年3月公表）。

流域治水プロジェクトは、球磨川流域に生きる人々にとって、球磨川そのものが「かけがえのない財産」であり、「守るべき宝」になっていることを十分踏まえ、「命と環境の両立」を目指して国、県、市町村、企業、住民など全ての関係者が協働し、以下の取組を実施することがポイントとされています。

- ① 氾濫をできるだけ防ぐ・減らすための対策
- ② 被害対象を減少させるための対策
- ③ 被害の軽減、早期復旧・復興のための対策

■「流域治水」施策イメージ



図出典：気候変動を踏まえた水災害対策検討小委員会資料、国土交通省九州地方整備局八代河川国道事務所ホームページ（<https://kumariver-r0207archive.jp/overview/detail/chapter4-2.html>）

令和2年7月豪雨では戦後最大の洪水により甚大な被害が発生したことや、球磨川流域は人吉・球磨盆地が急峻な山々に囲まれたすり鉢状の地形となっており、複数の急流支川が流れ込み、さらに盆地の下流側が山間狭窄部となり、豪雨時には水位が上昇しやすいという流域の特徴を踏まえ、国、県、市町村等が連携し、河道掘削、堤防整備（堤防補強）、輪中堤・宅地かさ上げ、遊水地等の取組を集中的に実施することにより、令和2年7月洪水と同規模の洪水に対して、越水による氾濫防止※（人吉市の区間等）、家屋の浸水防止※（中流部）など、流域における浸水被害の軽減を図る内容となっています。

人吉エリアにおいても、河道掘削や堤防の強化、遊水地や放水路の整備等の取組が示されています。

※従来から検討してきた貯留型ダム並びに再開発後の市房ダムによる洪水調節の効果を含む

■球磨川水系流域治水プロジェクト ロードマップ【令和5年5月】

区分	対策内容	実施主体	工程
氾濫をできるだけ防ぐ・減らすための対策 ※【緊】 河川における対策のうち、緊急治水対策プロジェクトとして位置づけている対策	河道掘削(中流域)【緊】 河道掘削(人吉地区)【緊】 河道掘削(低流域)【人吉地区】 引道【緊】 橋中堤・宅地かさ上げ【緊】 遊水地整備【緊】 河道掘削、堤防補強対策(下流域) 高瀬、貯蔵対策(下流域) 河道掘削・堤防整備【緊】 堤防整備・河道掘削(人吉地区、上流域) 流水ダム等6ダムにおける事前放流等の実施(自治体、企業)【緊】	国土交通省	第一階段(概ね5年) 以降(R12~)
	河道掘削等【緊】 御湯川放水路【緊】 堤防整備等【緊】 河道掘削・堤防整備等 橋中堤・宅地かさ上げ	熊本県 等	
	流水型ダム・市房ダム再開発【緊】	国土交通省、熊本県	
	砂防閘施設整備	国、熊本県 等	
	下水道等の排水施設整備	熊本県、市町村 等	
	雨水貯留・雨水浸透施設整備	国、熊本県、市町村 等	
	水田の貯留機能向上 ため地の増強、有効活用 農業水利施設整備 等	熊本県、市町村 等	
	森林の整備・保全、治山施設整備	国、熊本県、市町村 等	
	まちづくりと連携した高台への居住誘導、土地利用規制、誘導・移転促進	流域市町村 等	
	二級堤、自然堤防の保全	国土交通省 等	
被害対象を減少させるための対策	住宅門等の整備や排水機場等雨水化 避難行動・水防活動に資する基盤等の整備 避難を判断するための情報伝達 水害リスクの周知 平時からの住民等の防災意識醸成 防災活動の着実な実施・連携体制の構築 地域と連携した排水活動及び訓練、施設運用	国土交通省 熊本県 市町村 等	
被害の軽減、早期復旧・復興のための対策	自然再生事業 新設原備用地区かわまちづくり 坂本地区かわまちづくり 多自然川づくり 自然環境を活かした地域活動の取り組み	国土交通省 市町村 等	

気候変動を踏まえた
更なる対策を推進

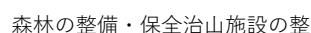
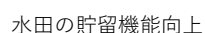
■河川対策
(約4,848億円)
※うち、流水型ダム
約2,680億円を含む
■砂防対策
(約266億円)
■下水道対策
(約25億円)

令和5年5月時点

図出典：国土交通省九州地方整備局八代河川国道事務所ホームページ
(https://www.qsr.mlit.go.jp/yatusiro/river/r007_after/r0207_ryuikitsui_goukensho/index.html)

[illegible]

- 河道掘削、引堤、輪中堤・宅地かさ上げ、遊水地堤防補強等
- 流水型ダム、市房ダム再開発 ※調査・検討に令和３年度から本格着手
- 砂防関係施設の整備
- 下水道等の排水施設の整備
- 雨水貯留、雨水浸透施設整備
- 水田の貯留機能向上
- ため池の補強、有効活用
- 農業水利施設の整備
- 森林の整備・保全、治山施設の整備
- 利水ダム等６ダムにおける事前放流等の実施、体制構築等

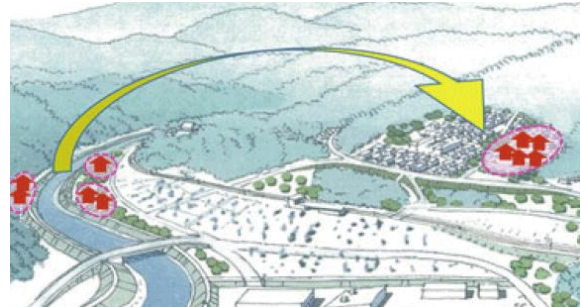


被害対象を減少させるための対策

- まちづくりと連携した高台への居住誘導
 - 土地利用規制・誘導（災害危険区域等）・移転促進
 - 不動産取引時の水害リスク情報提供
 - 二線堤、自然堤防の保全等
- ※今後関係機関と連携し対策検討



二線堤の保全



高台への居住誘導（集団移転）

被害の軽減、早期復旧・復興のための対策

- 排水門等の整備や排水機場等の耐水化
 - 避難行動、水防活動に資する基盤等の整備
 - 避難を判断するための情報伝達
 - 水害リスクの周知
 - 平時からの住民等の防災意識醸成
 - 防災活動の着実な実施・連携体制の構築
 - 地域と連携した排水活動及び訓練、施設運用 等
- ※今後関係機関と連携し対策検討



庁舎等の浸水対策の実施



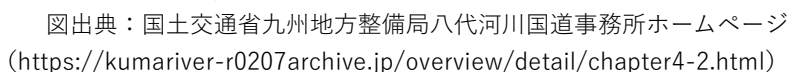
R2.7 豪雨の課題を受けたタイムラインの改善

図出典：国土交通省九州地方整備局八代河川国道事務所ホームページ
(<https://kumariver-r0207archive.jp/overview/detail/chapter4-2.html>)

「球磨川水系流域治水プロジェクト」で取り組むメニューのうち、再度の災害を防止する観点から、5～10 年程度で実施するプロジェクトメニューについては特に「球磨川水系緊急治水対策プロジェクト」として抽出し、速やかに着手することとされています。

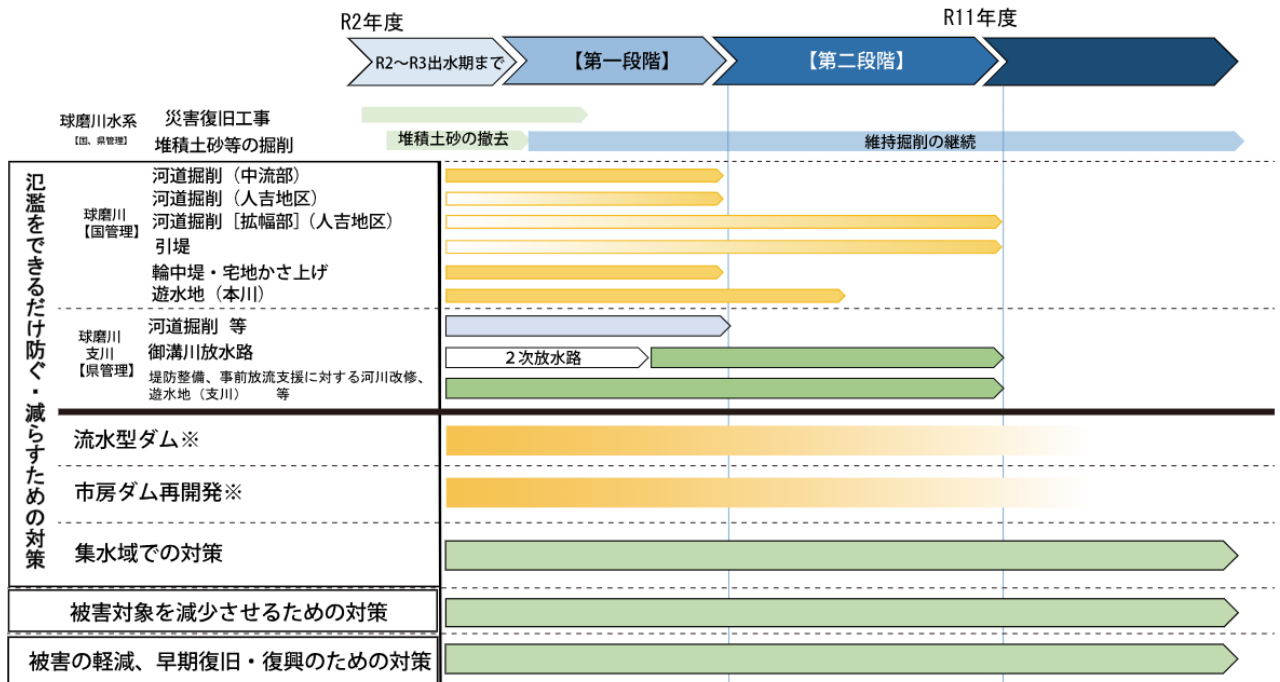
球磨川水系緊急治水対策プロジェクトは、被災箇所の河道掘削や堤防整備、輪中堤・宅地かさ上げ、遊水地等の取組を集中的に実施し、令和２年７月豪雨と同規模の洪水に対して越水による氾濫防止や家屋の浸水防止といった流域における浸水被害の軽減を図る内容となっています。

※具体的な対策内容については、今後の調査・検討等により変更となる場合があります。



流域治水プロジェクトの完了には約 10 年の期間を要すると想定されることから、当面の間は令和 2 年 7 月豪雨と同様の降雨があれば、同程度浸水するリスクがあります。

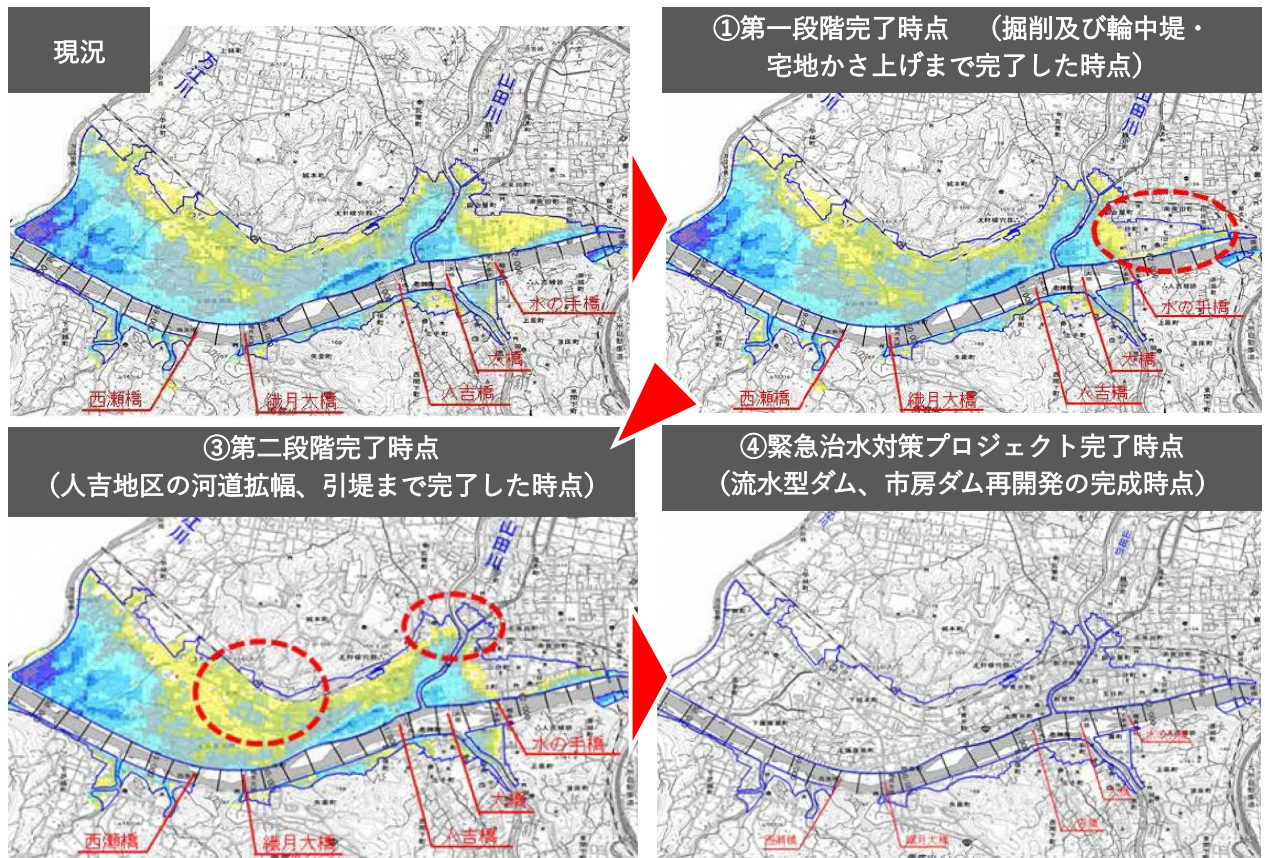
■球磨川水系緊急治水対策プロジェクトの実施計画（予定）



※調査・検討の結果を踏まえて、事業期間等を決定

図出典：国土交通省九州地方整備局八代河川国道事務所ホームページ
(<https://kumariver-r0207archive.jp/overview/detail/chapter4-2.html>)

■プロジェクト進捗段階別の浸水想定区域

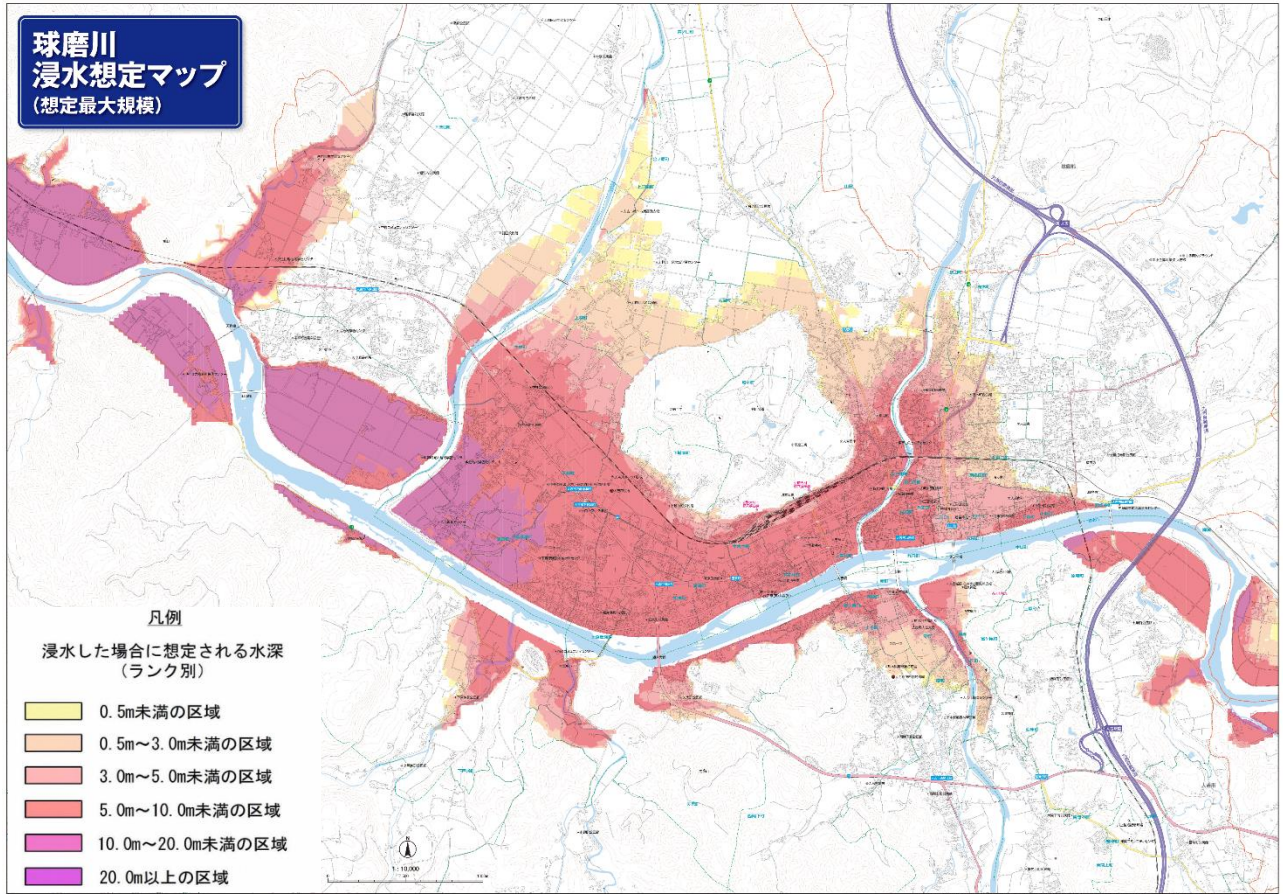


図出典：「球磨川水系流域治水プロジェクト」、「第4回 球磨川流域治水協議会 資料」をもとに作成

また、想定最大規模※の降雨の場合は、球磨川右岸側は村山台地を除いた市街地が広範囲に渡り浸水するリスクがあります。

※水防法の規定により指定された想定し得る最大規模の降雨（人吉上流域の12時間総雨量502mm）。

■想定最大規模降雨の場合の浸水想定

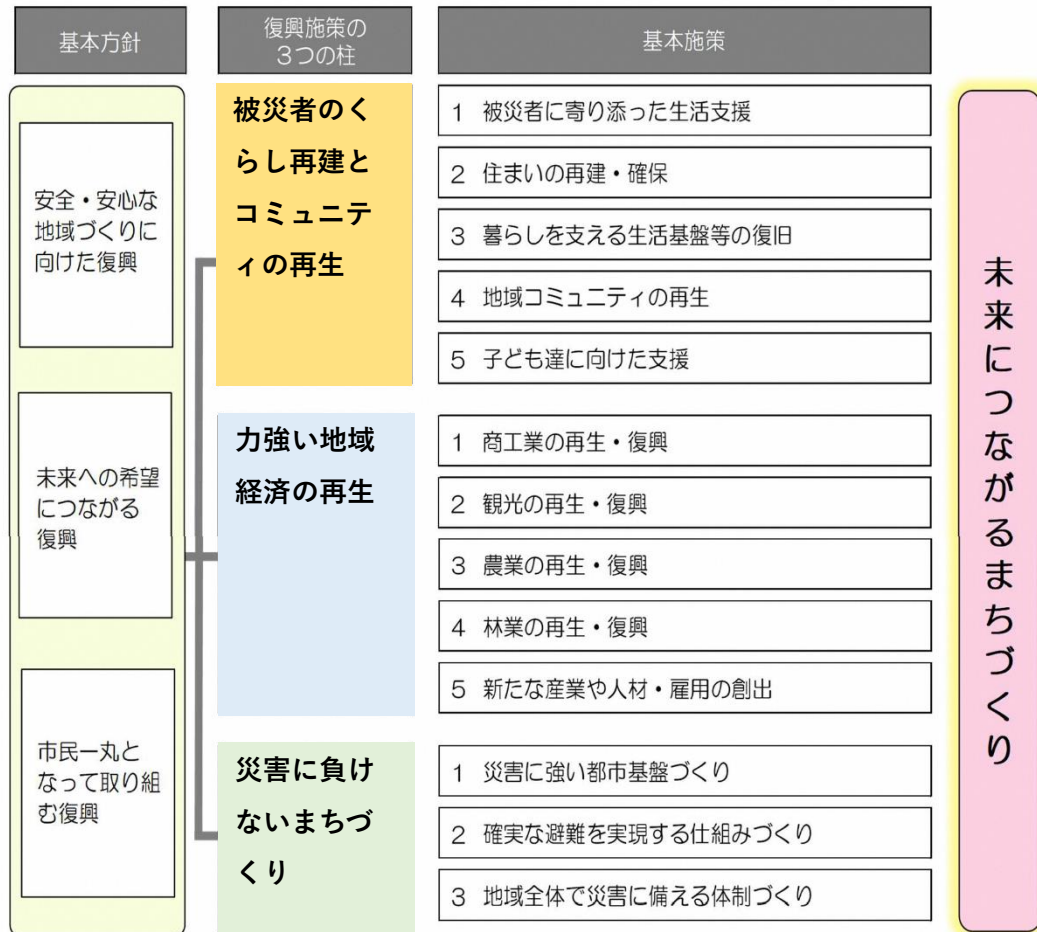


図出典：球磨川浸水想定マップ（想定最大規模）

2 復興まちづくりの進捗

復興まちづくり計画（当初策定）に示す復興に向けた3つの柱ごとに、進捗状況を整理します。

■当初計画の施策体系（復興計画）



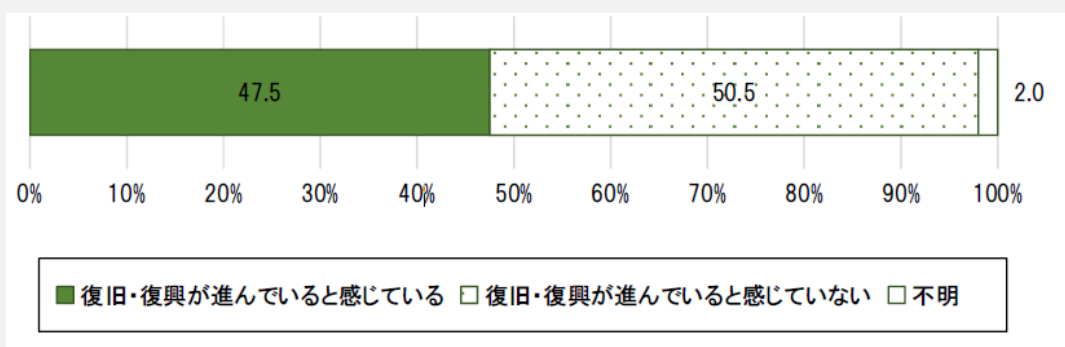
（出典：「人吉市復興計画（第1期）」（令和3年3月））

（参考）復興にかかる市民意識

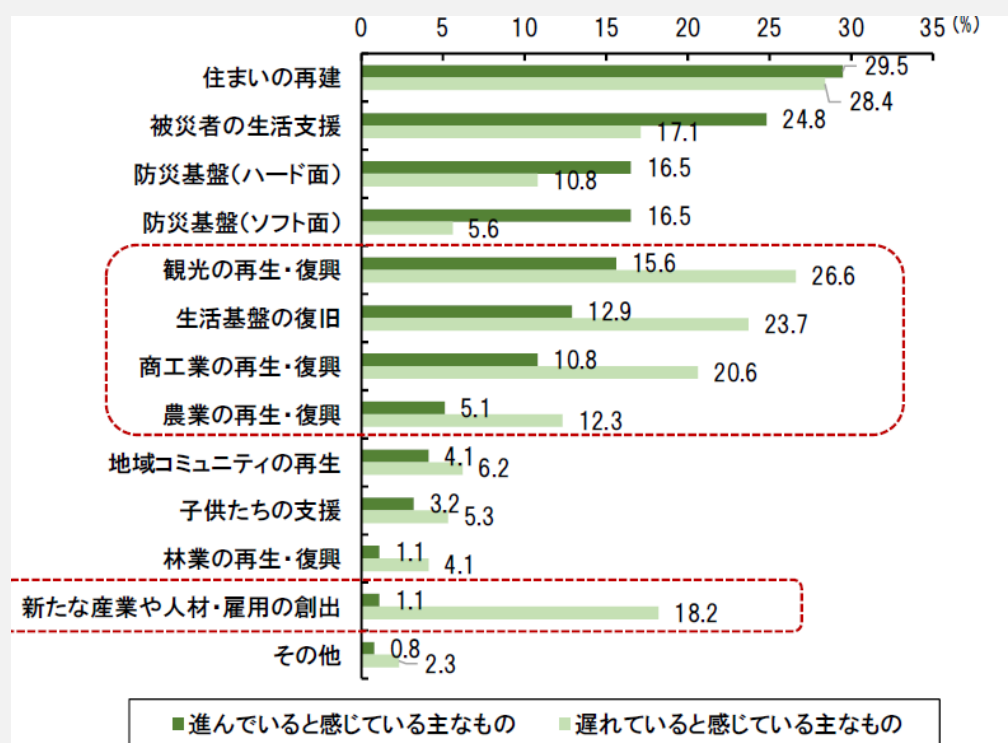
2022(令和4)年8月に実施した市民意識調査によると、人吉市の復旧・復興は進んでいるかどうかという質問に対し「進んでいると感じている」と「進んでいると感じていない」の割合は、ほぼ同じとなっており、評価は分かれています。また、「観光の再生・復興」「商工業の再生・復興」「新たな産業や人材・雇用の創出」といった産業に関することにおいて、「復旧・復興が進んでいない」と感じていることが伺えます。

上記の調査以降、各分野においてさらなる取組が推進されていますが、産業分野については他分野に比べて市民の実感が得られていないことから、重点的に取り組む必要があります。

■あなたは、人吉市の復旧・復興は進んでいると感じていますか。



■復興が「進んでいると感じている主なもの」と「遅れていると感じている主なもの」



資料：市民意識調査